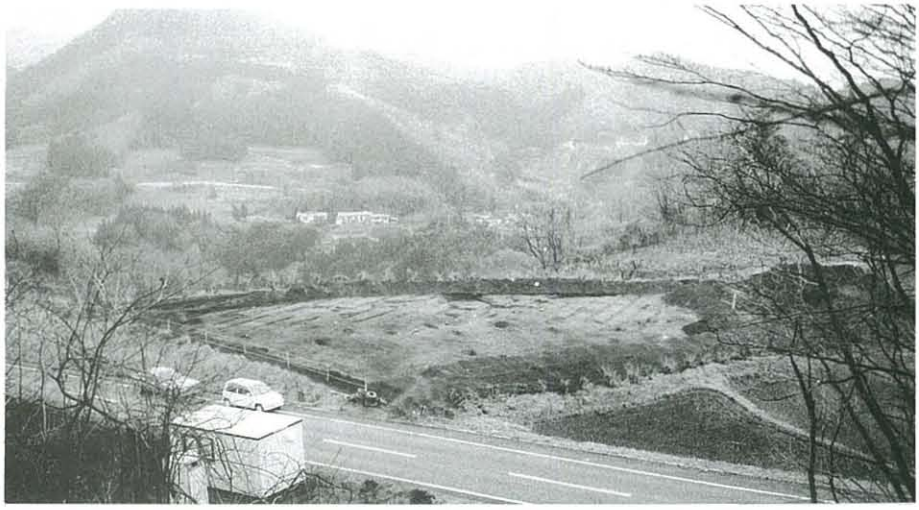
中之条町 発掘調査報告書第11集

蟻川遺跡群 柳沢遺跡



1990

群馬県　中之条町教育委員会

序　文

中之条町は古来より多くの文化の繁栄を育んだ地であり、先人達の遺産がさまざまな形で現在に生きる私たちの前に残されています。これらかけがえのない文化遺産を次代に残し伝えることは、私たちに与えられた責務でありますが、近年農地の効果的利用を図るため町内の各地域で土地改良事業の必要性が生じており、これに伴い文化財保護の面からの調整が要請されています。そして過去幾度か記録保存のための発掘調査が行なわれ、数々の学術的に重要な成果を上げております。

今回、町内の蟻川地区において土地改良事業の一環として圃場整備が計画され、これに際し発掘調査が行なわれました。この結果、縄文時代前期を中心とする集落跡が確認され、当地域における原始の人々の活発な狩猟活動の一端を伺い知る貴重な資料を得ることが出来ました。今後この成果が多方面に活用され、町内外の方々の郷土の歴史や文化財に対する理解の進展に寄与し、さらなる文化財保護行政の一助となれば幸いに存じます。

最後に、本遺跡の調査から本書の刊行に至るまでご指導ご協力いただいた関係各位に厚く感謝の意を表し、並びに極寒の中調査に参加していただいた作業員の方々のご苦労をねぎらい、序と致します。

平成2年3月　　中之条町教育委員会　教育長　一　場　秀　司

例　言

1. 本報告書は、群馬県吾妻郡中之条町大字赤坂2261番地外に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に関するものである。
2. 本遺跡は、蟻川遺跡群柳沢遺跡（ありがわいせきぐんやなぎさわいせき）と呼称する。
3. 調査組織は以下の通りである。

   調査主体者

   中之条町教育委員会教育長　一場　秀司

   調査担当者　福田　義治

   調　査　員　別記
4. 遺物整理、トレース、および本書の編集・執筆は木村が中心になって行なった。なお遺跡の略号には「ＡＹ」を用いた。
5. 発掘調査および報告者作成にあたり下記の方々のご協力を頂いた。（敬称略）

   群馬県教育委員会文化財保護課、谷藤保彦、関根慎二、中之条町文化財専門委員各位、立正大学考古学研究会各位、株式会社測研
6. 調査参加者は以下の通りである。（敬称略）

   （発掘調査）

   小渕とし江、高平光江、田村さだ、田村その子、田村はるの、田村久子、綿貫絢子、綿貫幾代、綿貫恵美子、綿貫ちよ、綿貫博

   （整理作業）

   加辺美江子、宮崎文江

目　次

調査に至る経緯と経過……1

地理的環境……1

周辺の遺跡と調査……2

調査の概要……3

遺構と遺物……4

調査の成果と課題……19

石器観察表……29

1．調査に至る経緯と経過

中之条町では平成元年から平成2年の2ヵ年にわたり、蟻川地域の柳沢地区を対象として、土地改良事業を実施することとなった。対象地の総面積は16,000㎡、その内訳は水田 7,000㎡、畑 9,000㎡である。

当地区は町の埋蔵文化財遺跡台帳に登録されており、表面調査の結果地表面に遺物の散布がみられた。さらに試掘調査をおこなったところ、縄文時代を主体とする遺構の存在が明らかとなった。そこで、遺構が認められた事業実施にともない失われる可能性がある部分（ 800 ㎡）につき、本調査に移行することで事業側との合意を得た。

中之条町教育委員会では同職員福田義治、同臨時職員木村芳昭（立正大学3年）を調査員として平成2年2月16日調査を実施した。

調査はまず重機により現耕作土の除去をおこない、続いて人力による精査により遺構の確認作業を行なった。そして確認された遺構の覆土を慎重に取除き、遺物の出土位置や遺構の形状、さらに遺構配置などを測量や写真撮影により記録し、平成2年3月30日現地調査を終了した。

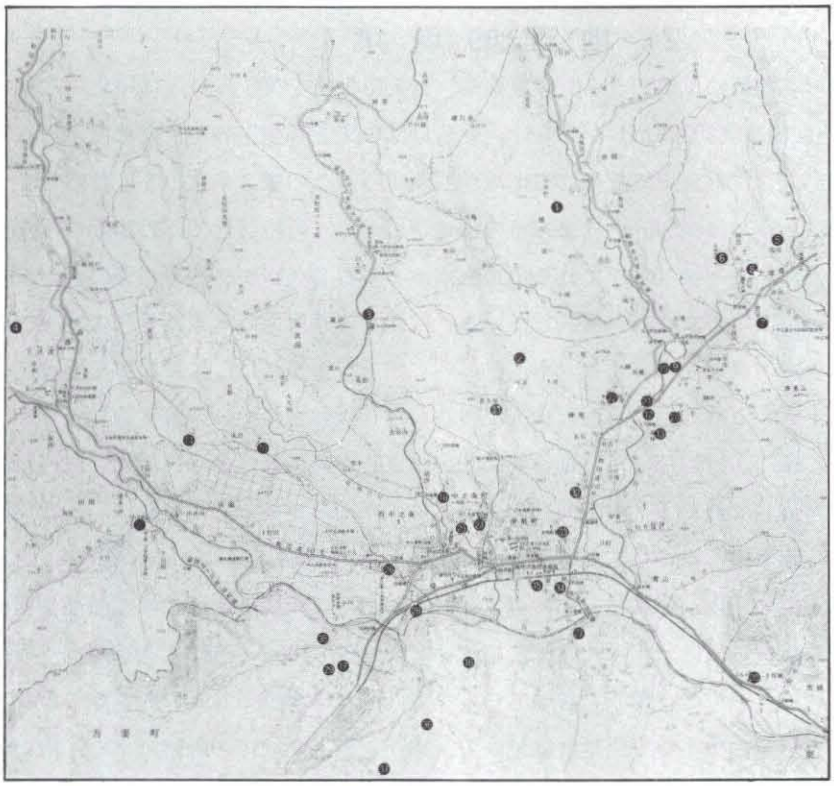
2．地理的環境

中之条町は群馬県の北西部に位置する。町の東南端、吾妻町と境を接する付近に中之条盆地と称する狭い盆地(盆地底の標高約330ｍ）がひらけ、そのほぼ中央を利根川の一大支流である吾妻川が東流し、両岸に形成された河岸段丘上に市街地が展開する。この中之条盆地をとり囲むように町の西部から東部にかけて標高500ｍ～1,000ｍの山地が広がり、町境付近では1,200ｍ～1,700ｍの山嶺となり北境は新潟県と接する。これら山地を水源とする名久田川や四万川等の吾妻川各支流はその流域に吾妻川同様河岸段丘を形成している。段丘上の平坦面は先土器時代より現代に至るまで人々の主な生活の場となっている。本遺跡の所在する蟻川地区は、名久田川の支流である赤坂川と蟻川川の形成する段丘崖に東西両縁を浸食された丘陵状台地上に位置する。この丘陵状台地は舌状を呈し、蟻川岳(標高853ｍ）裾(標高550ｍ付近）から南東へ2㎞程伸び、両河川の合流地点(標高480ｍ付近）で終わる。川床面との比高差は平均70ｍを測る。本遺跡はこの合流地点から、東縁を流れる赤坂川を4㎞程さかのぼる段丘崖最上部、標高518ｍ付近に立地する。西方約20ｍには比高差50ｍ程の小山が隣接し、その直下に湧水がある。小山は北にかけて斜度を緩め南傾し、山裾は本遺跡付近でほぼ水平となり、そのまま南東方向へ100ｍ程伸びて急に傾斜を強めて川床へと向かっている。一方で、湧水を谷頭とし南東方向へと小規模の谷が形成されており、本遺跡は細長い棚状を呈する狭小な平担地に立地する。東から西にかけての眺望はよく、南東には遠く十二ケ岳（標高 1,200.9ｍ）が望める。

3．周辺の遺跡と調査

本遺跡と同様に標高 500m以上の山林中に所在する遺跡の調査例は周辺にほとんど無く、やや距離的に離れるが四万川右岸の標高 550m付近に位置する伊賀野遺跡において縄文時代前期の住居跡2軒が確認されている。本遺跡の所在する蟻川地区をはじめとし、岩本・五反田・四万の各地区の山林中では縄文土器の散布地が発見されており、未調査ながら多数の遺跡の存在が伺われる。名久田川流域では大塚・平の両地区においては過去幾度となく発掘調査が行なわれており、赤坂川との合流地点付近に所在する下平遺跡、そこから約3km上流の段丘面上に所在する五十嵐遺跡や宿割遺跡は、本遺跡とほぼ時期を等しくする縄文時代前・中期及び弥生～平安時代の住居跡が確認されている。やや下流域に位置する下尻高遺跡でもほぼ同じ様相を呈するが、縄文時代に比定されるものは土器片及び石器が出土したのみである。尚、この付近には樋塚古墳をはじめ小規模な円墳が多く平古墳群を形成している。以上の遺跡は標高400m～380m付近に位置するが、これより下流、吾妻川との合流地点周辺の標高 330m付近においては縄文時代の遺跡はほとんど見受けられず、平安時代の集落跡が確認された上原遺跡を含む伊勢町遺跡群は弥生～歴史時代の複合遺跡からなる。

❶柳沢（縄文時代）❷奥山原（縄文時代）❸白久保（縄文時代）❹伊賀野（縄文時代）❺諏訪原（縄文時代）❻宿割（縄文時代）❼寄居原（縄文時代）❽五十嵐（縄文・平安時代）❾下平（縄文・平安時代）❿成田原千貫（縄文・弥生時代）⓫清水敷石住居跡（縄文時代）⓬管田（平安時代）⓭下尻高（弥生・平安時代）⓮成田（弥生時代）⓯天神（弥生時代）⓰白山神社（弥生時代）⓱中学校裏（弥生時代）⓲法満寺（弥生時代）⓳平古墳群（古墳時代）⓴名久田12号墳（古墳時代）㉑樋塚古墳（古墳時代）㉒名久田中学校遺跡（古墳時代）㉓長久保(古墳時代)㉔法満寺土師遺跡（古墳時代）㉕法満寺A遺跡（古墳時代）㉖永田原（古墳時代）㉗竜ケ鼻（古墳時代）㉘石ノ塔古墳（古墳時代）㉙大宮（古墳時代）㉚市城古墳群（古墳時代）㉛下郷(古墳時代)㉜水牢跡（近世）㉝天台瓦窯跡(奈良・平安時代)㉞上原（平安時代）㉟稲荷城（中世）㊱金井廃寺（奈良時代）



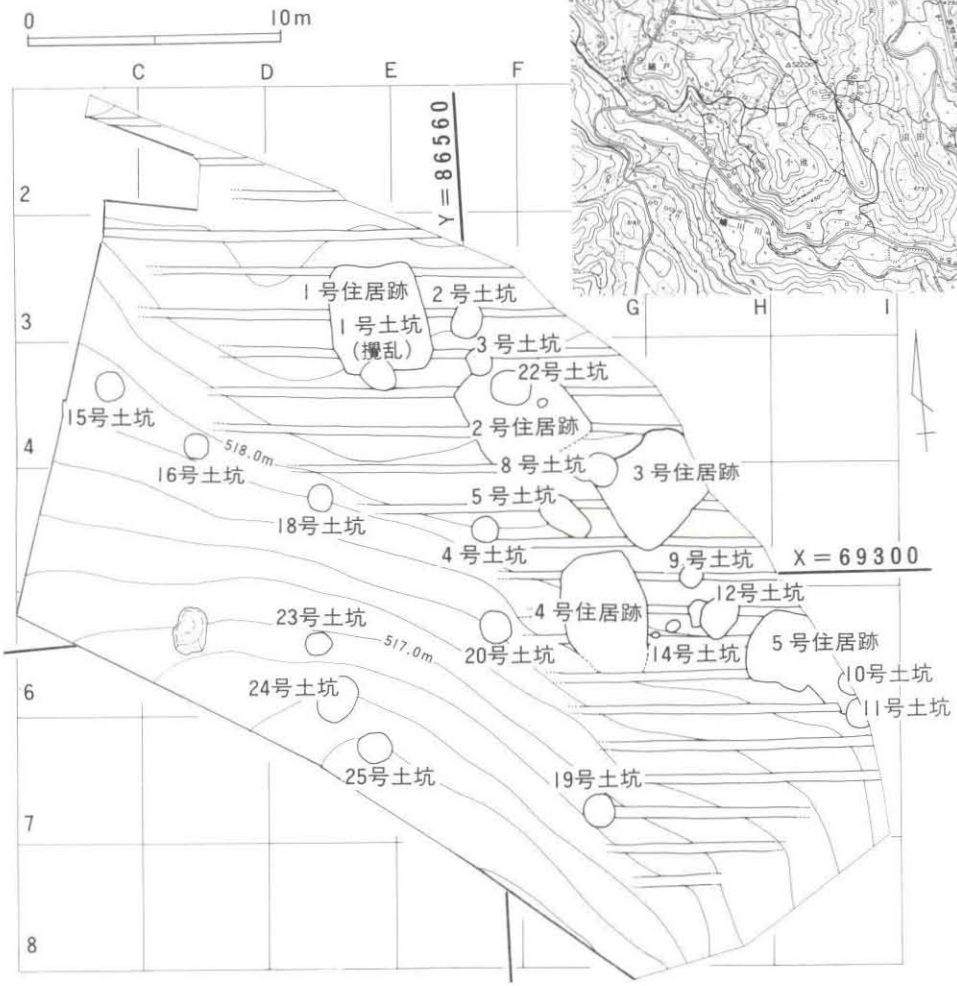
第1図　柳沢遺跡位置及び周辺の遺跡　　1：75,000

4．調 査 の 概 要

本調査区の東半部は棚状の平坦地であるが、西半部は南西方向に比較的緩やかに傾斜し開析谷へと向かっている。傾斜地には縄文土器及び土師器の小破片を少量混入する粘質黒褐色土の厚い堆積があり、これは北方の山から比較的急速に流入したものと思われ、層中での遺構の確認はなかった。遺構確認はローム層上面で行ない、縄文時代の住居跡6軒・土坑25基が認められ、住居跡はすべて平坦地に占地するが、土坑は傾斜地にもみられた。尚、調査区全体に幅平均50cm・深さ20cm内外の溝が東西方向に約110cmの間隔で規則正しく掘られている。時期は明確ではないが、覆土内に浅間山噴出B軽石類似の軽石粒をまばらに含む。

第2図a　柳沢遺跡周辺地形図　1：30,000▶

第2図b　柳沢遺跡調査区全体図



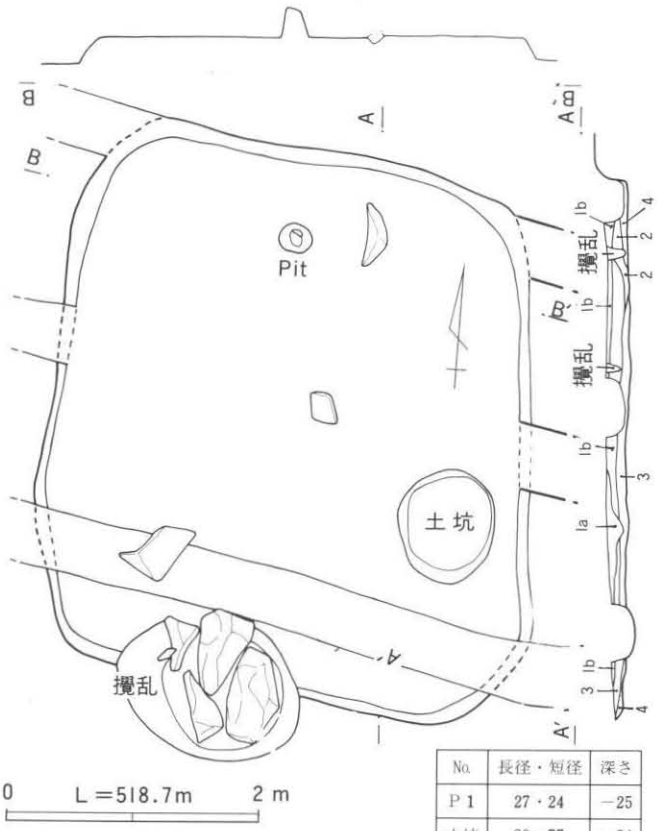
5．遺構と遺物

① 住居跡

第1号住居跡

E－2，3、F－2，3グリッドに位置する。長軸方向N－90°－E。形状は長軸4.10m、短軸3.65m、南東コーナーがやや張り出す隅丸長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、その残存高は14cmである。床面は比較的平坦で、やや堅緻である。住居中央やや南東寄りの土坑が住居に伴うものかどうかは不明である。

遺物は土器片のみで、床面上での出土は6のみである。1は早期条痕文系。2～5は同一個体で縦長コンパス文・地文閉端環付（0段多条）を施す。6～9は連続爪型文を主とし、7は劣截竹管外側刺突を施す。10～13は羽条縄文を施し、10は0段3条のRとL、11～13はRLとLRを施し、11は0段多条、12は一部のLRにのみ0段多条の使用、13には結節が認められる。

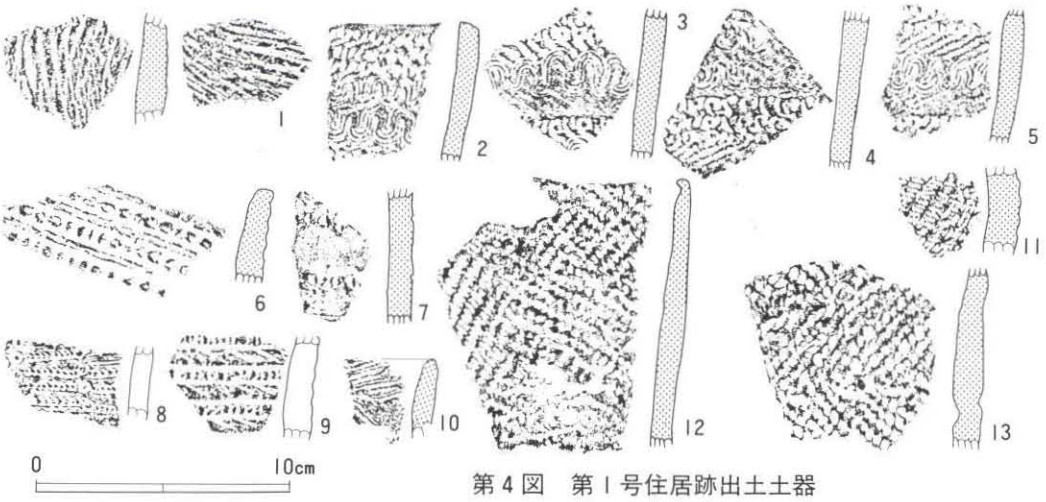


No.	長径・短径	深さ
P1	27・24	－25
土坑	89・77	－24

表1　1号住居跡柱穴観察表
（数値は床面基準　単位はcm）

1．褐色土　ローム粒子微量含む。
　1bは加えてロームブロック微量含む。
2．褐色土　ロームブロック多量含む。
3．褐色土　ロームブロック少量含む。明褐色土（粘質）粒子含む。
4．壁土崩落土
※全体に炭化物粒子微量含む。

第3図　第1号住居跡 平面・断面図



第4図　第1号住居跡出土土器

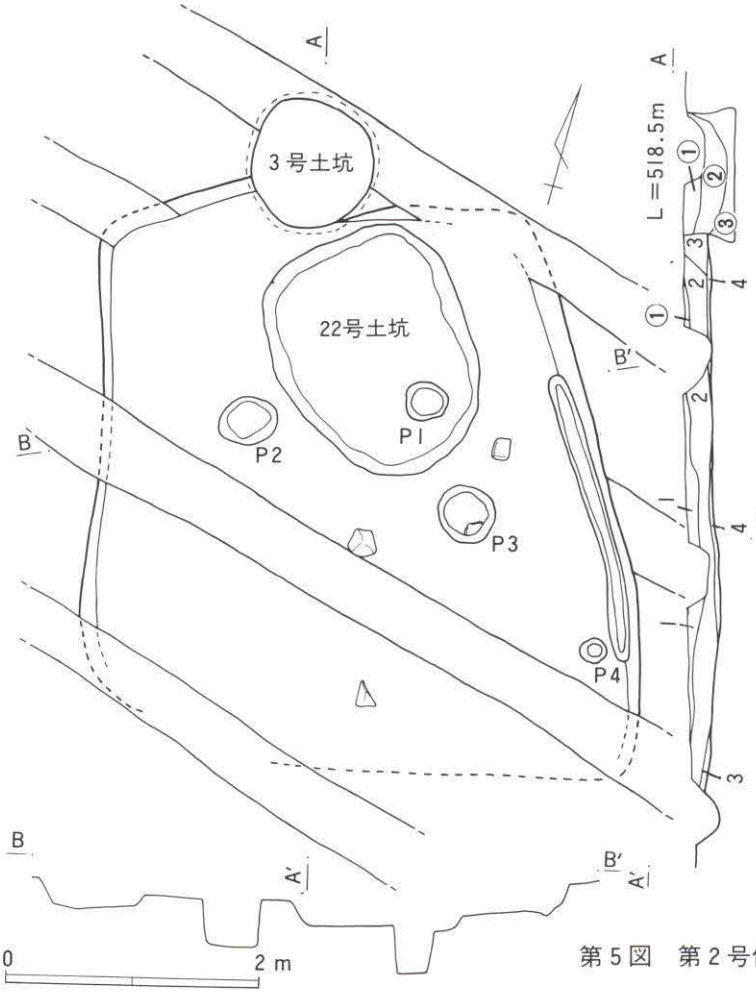
第２号住居跡

調査区の中央やや北東寄り、Ｆ－３，４及びＧ－３グリッドに位置する。北側壁中央付近において３号土坑、住居内の中央やや北寄りにおいて22号土坑と重複する。先後関係は土層断面の観察から、22号土坑→２号住居→３号土坑であることが確認される。

形状は、南側壁が削平のため失われ、さらに各コーナーは後世の溝状遺構による破壊のため不明であるが、長軸46.0ｍ、短軸39.0ｍの南東に広がる台形を呈すると推定される。長軸方向はＮ－150°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がり、その残存高は最高20cmである。

床面は平坦で、比較的軟弱である。ピットは全部で４基が確認されたが、Ｐ１については22号土坑に伴う可能性もある。主柱穴として想定可能であるのはＰ２，Ｐ３である。東側壁下に一部周溝が確認され、その規模は床面を基準として、幅平均14cm、深さ平均10cmである。

遺物は土器片及び石器・石片で、そのほとんどは住居中央付近、覆土上面から床面にかけて集中して出土している。またＰ３覆土中より32が出土した。



No.	長径・短径	深さ
Ｐ１	34・29	－37
	（土坑底面基準）	
Ｐ２	45・37	－35
Ｐ３	47・44	－32
Ｐ４	19・19	－10

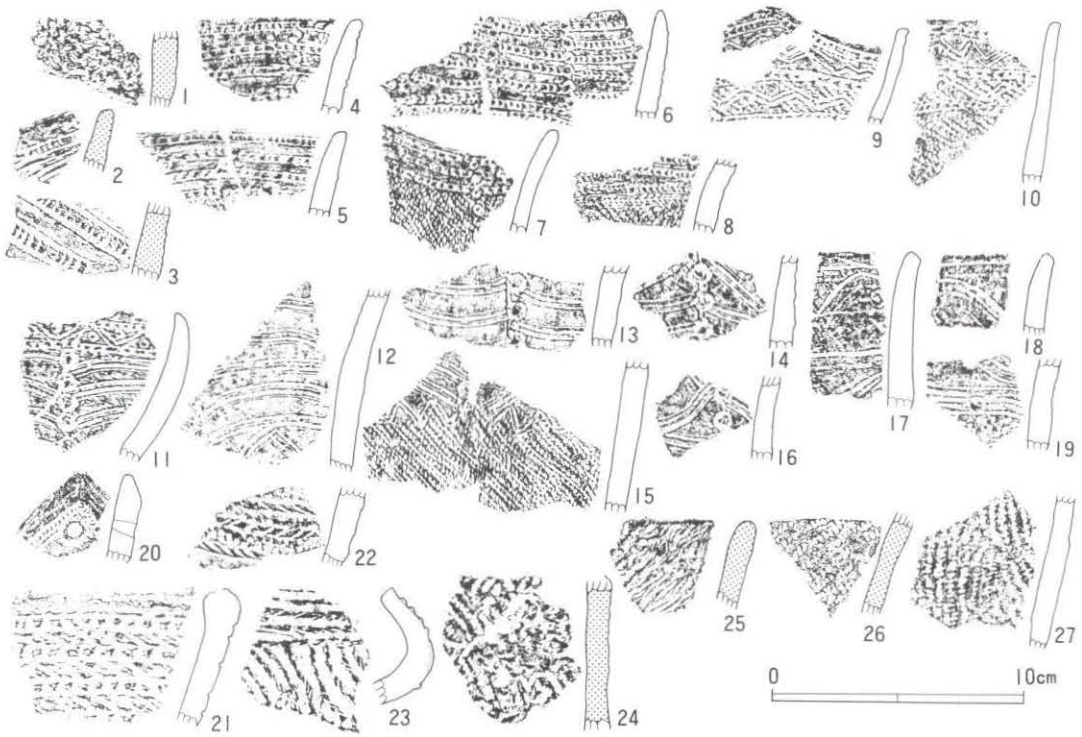
表２　２号住居跡柱穴観察表
（数値はＰ１を除き床面基準単位はcm）

２号住居
１．褐色土
２．褐色土　ローム粒子微量含む。炭化物粒子少量含む。
３．壁土崩落土
４．褐色土　上層に比べてかなり良く締まる。（３号土坑）
①褐色土　ロームブロック少量含む。
②褐色土　ロームブロック含む。
③褐色土　ロームブロック多量含む。

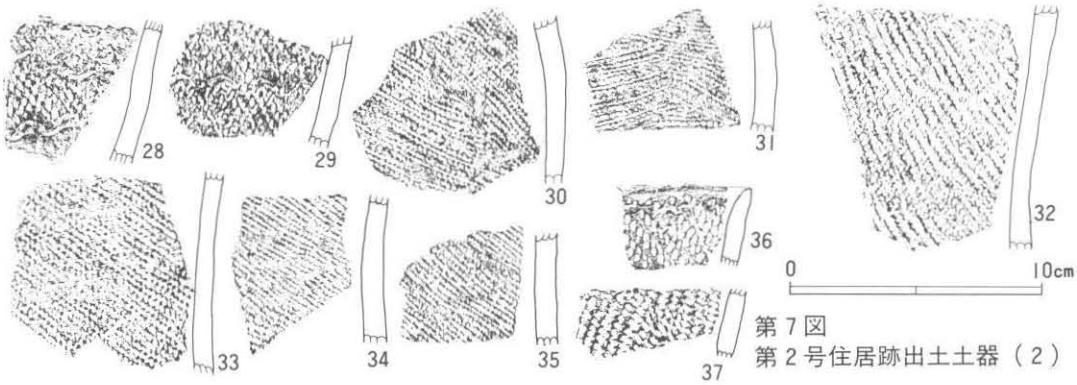
第５図　第２号住居跡 平面・断面図

第２号住居跡出土遺物

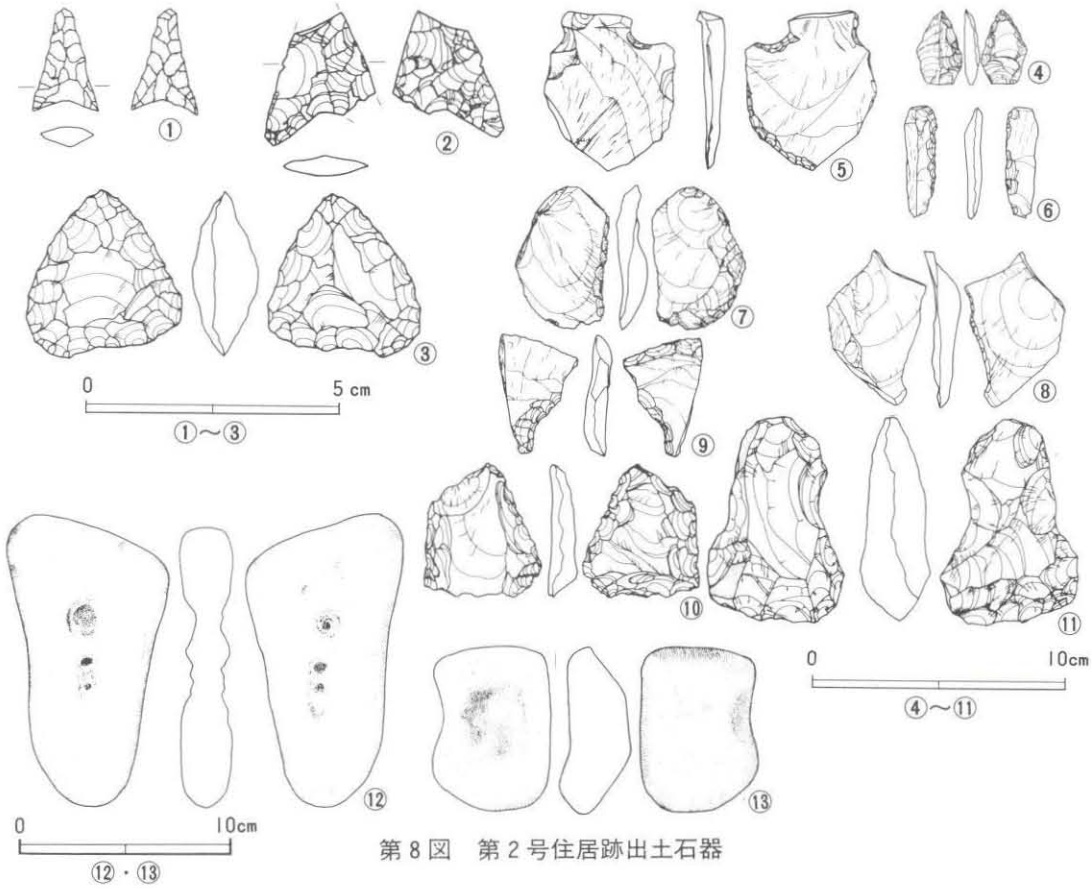
１は前々段合撚とし、コンパス文を施す。２～８及び21は半截竹管による平行沈線＋連続爪型文を主とするものである。２は複数の平行沈線、４～８は縦位の円形刺突（列）、21は斜位の刻目を併せて施す。３は肉薄・幅広の劣截竹管を使用。９・10は同一個体である。口唇直下に平行沈線＋連続爪型文を１条、以下波状平行沈線と交互に２条ずつ巡らす。そしてこの文様帯の下半部以下には、地文としてＲＬが認められる。11～19は櫛歯状・篦状の施文具を多用し、いずれも縦位の円形刺突（列）を施す。11～15は同一個体であり、肋骨文を主とする。口縁部に平行沈線＋連続爪型文を２条巡らし、その間を平行沈線により鋸歯状に区画、さらにその区画内に円形刺突を一つずつ配している。また文様帯の下位区画として波状平行沈線を１条巡らし、以下地文としてＲＬにＲを附加した第一種附加条を施す。16も肋骨文であろう。17～19は同一個体であり、波状文を施す。20は口縁波頂部であり、口唇直下に平行沈線＋連続爪型文を施し、貫通孔が縦位に二つまで確認できる。22・23は斜位の刻目を施した浮線文を主とするもので、地文としてＲＬを施す。23は口縁部片であり、強く内折する。24～37は縄文のみの破片である。24はＲＬを２本用いて結節回転を施す。25は反撚りＬＬ、27はＲＬとＯ段多条によるＲＬ、37はＬＲをそれぞれ施す。28・29には綾繰文が認められる。11～15と30・31、17～19と28・29はそれぞれ同一個体と考えられる。



第６図　第２号住居跡出土土器（１）



第７図
第２号住居跡出土土器（２）



第８図　第２号住居跡出土石器

第３号住居跡

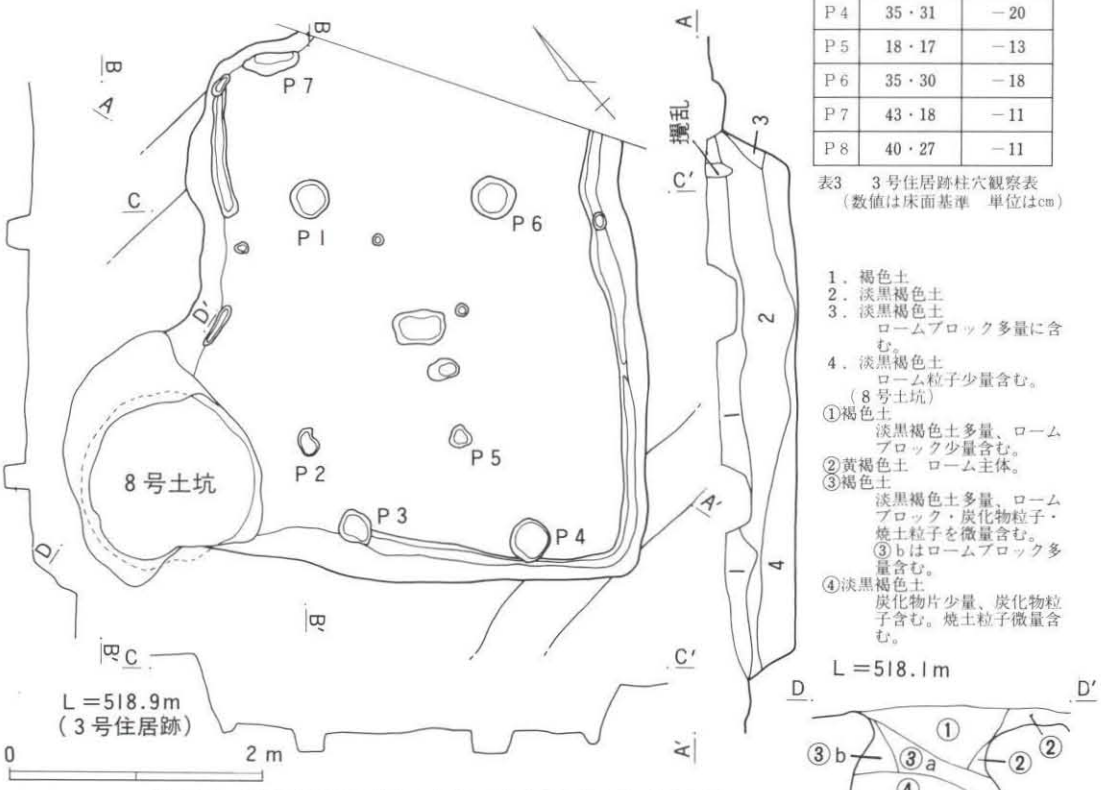
調査区の東寄り、Ｃ－３・４グリッド、Ｈ－３・４グリッドに位置する。北東コーナー付近と東側壁の大部分は調査区域外である。北西コーナー付近を８号土坑により破壊されている。形状は長軸40.0ｍ・短軸30.5ｍで、南西にわずかに広がる台形を呈すると推定される。主軸方向はＮ－60－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がり、残存高は最高60㎝である。

床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。住居中央付近に炉の痕跡と考えられる落ち込みが存在

するが焼土は認められなかった。主柱穴として想定可能なものはＰ１～Ｐ５である。周溝は南側・西側壁下においては断続的であり、その規模は床面を基準として幅平均９㎝、深さ平均14㎝である。

No.	長径・短径	深さ
P1	31・30	－21
P2	21・14	－17
P3	31・25	－17
P4	35・31	－20
P5	18・17	－13
P6	35・30	－18
P7	43・18	－11
P8	40・27	－11

表3　３号住居跡柱穴観察表
（数値は床面基準　単位は㎝）



第９図　第３号住居跡及び第８号土坑 平面・断面図

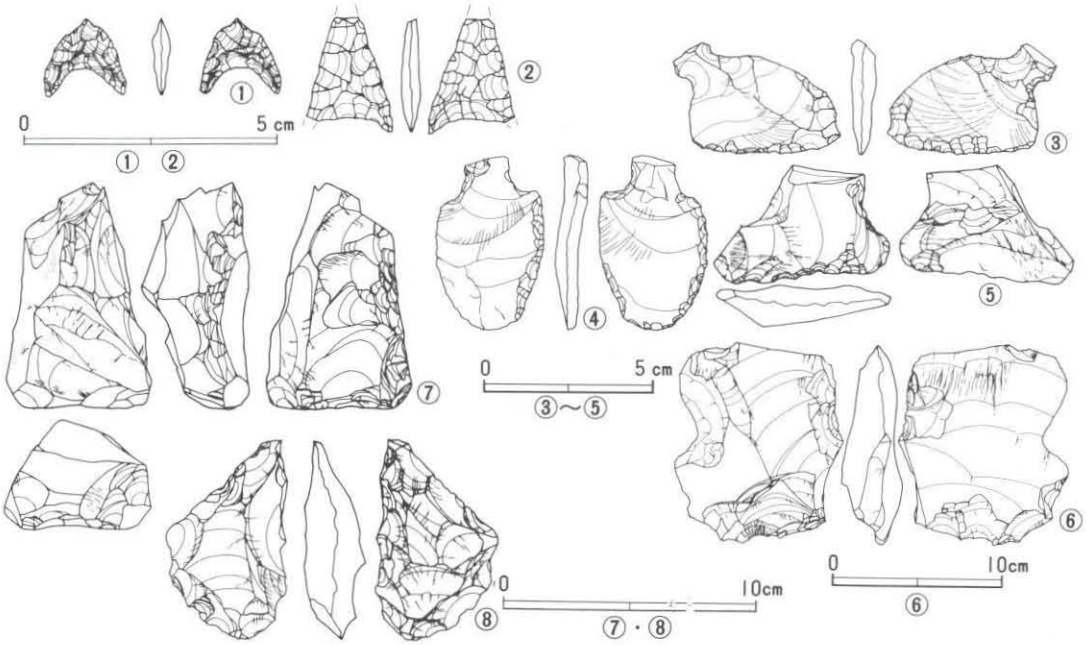
第３号住居跡出土遺物

遺物は土器片及び石器・石片で、多くは住居中央付近から北東コーナーにかけての覆土上面から下面において出土した。

１・２（同一個体）は、刻みのある細隆帯と撚糸側面圧痕を巡らし文様帯区画とし、円形刺突と弧状の撚糸側面圧痕を施し、地文は０段多条使用ＬＲ・ＲＬの羽状縄文を幅狭に施す。３・４及び21～23、さらに第13図－９は同一個体である。波状を呈する口縁に沿い平行沈線＋連続爪型文を２条巡らし、以下縦位の数条の直線や曲線を平行沈線と連続爪型文で描き、円形刺突を併せ施す文様帯区画とし、連続爪型文を２条巡らし以下Ｌ及びＲをそれぞれ２本用いた結節回転を施す。５は平縁で鋸歯状の小突起をもつ。口縁部には２～３条１組の平行沈線により弧線や斜位の直線等を描き、下位区画としてコンパス文を巡らす（コンパス文は胴部にも巡らす）。地文は最終段Ｒの前々段合撚を施す。６は地文Ｌに肉薄の連続爪型文を巡らす。７～９は口縁沿いに平行沈線を数条巡らし、７・８は一部に連続爪型文を充塡、９はＲＬを施す。10～12は平行沈線＋連続爪型文を主とし、10はＲＬ、12はＬＲを施す。13～15は沈線主体、15は口縁部がくの字に外反

し、胴部は下方へややすぼまり加減の器形を呈す。頸部以下羽状の集合沈線を巡らし、口唇部にはＬＲを押圧する。16～19・27・28はＬＲ・ＲＬの羽状縄文を施すもので、16～18は０段多条を用いた幅狭のもの、19・27はＬＲのみ０段多条を用いる。また29は無節Ｌ・Ｒの羽状縄文、20は附加条ＬＲ＋Ｌ、24はＬ・Ｒ２本ずつの結節回転、26は閉端環付ＬＲ、30～32はＲＬを施す。

第10図　第３号住居跡出土土器

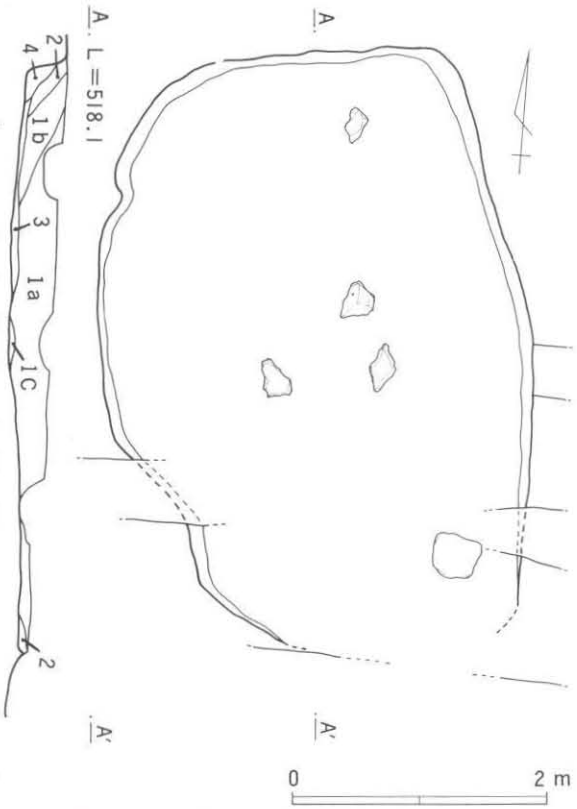


第11図　第3号住居跡出土石器

第4号住居跡

調査区中央やや南東寄り、G－4・5グリッドに位置する。主軸N－0°－E。

形状は南側壁を削平されるが、長軸45cm、短軸32cmの隅丸不整長方形を呈すると思われる。西側壁は外側に強く膨らむ。壁の残存高は最高30cmである。床面は中央部がやや窪み、比較的軟弱である。中央付近に人頭大の扁平な角礫が平担面を上に3個体置かれ、敲台としての用途も推定される。焼土は確認されなかった。



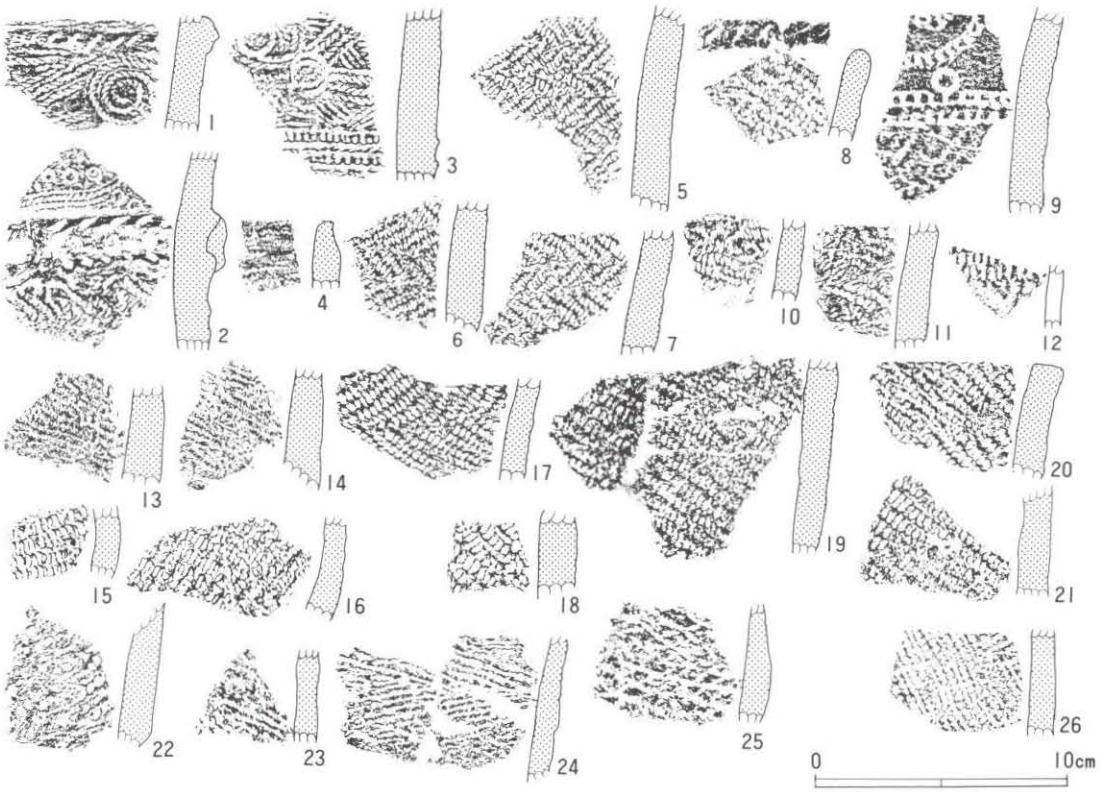
1. 淡黒褐色土　1bは炭化物粒子微量含む。1cはロームブロック含む（攪乱）。
2. 褐　色　土　ローム粒子少量含む。
3. 淡黒褐色土　ロームブロック含む。炭化物粒子微量含む。
4. 壁土崩落土

第12図　第4号住居跡平面・断面図

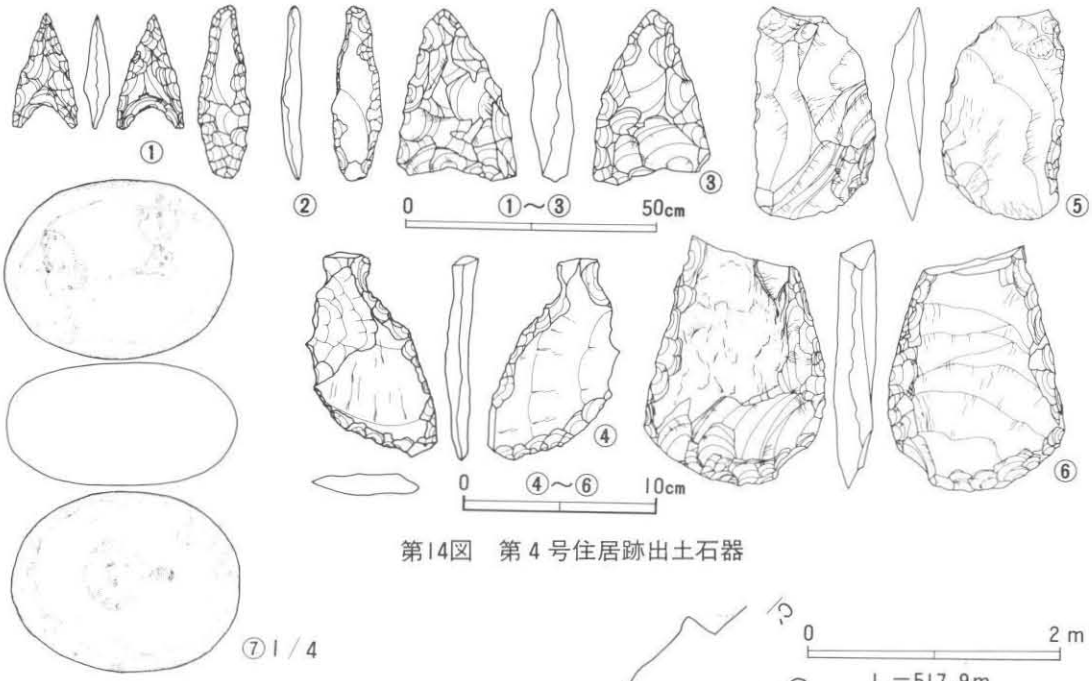
第４号住居跡出土遺物

遺物は土器片及び石器・石片で、そのほとんどが覆土中の上面から下面においての出土である。

１は斜位の刻みを施した隆帯を巡らし、撚糸側面圧痕により渦巻等の文様を描く。２は文様帯区画として斜位の刻目を施した隆帯を２条巡らし（一部連結が認められる）、間に円形刺突を横位に連続して施す。文様は撚糸側面圧痕と円形刺突により描き、地文はＲ（０段多条）２本の結節回転を施す。３は文様帯区画として刻目を施した細隆帯と撚糸側面圧痕を交互に複数ずつ（２条まで確認出来る）巡らす。文様は撚糸側面圧痕により描き、その交点等に円形刺突を施し、さらに余白には刺切文を充塡する。４は口唇直下に撚糸側面圧痕、その下に稜をそれぞれ巡らし、以下再び撚糸側面圧痕を施す。５～７は０段多条を用いたＬＲ・ＲＬで羽状縄文を幅狭に施す。８は波状口縁波頂部で、口唇上に斜位の刻目を施し、以下ＲＬを施す。10・11（同一個体）はＲ（０段多条）２本による結節回転を施す。12は多截竹管による連続刺突を施す。10・11（同一個体）は０段多条の短い縄を用いたＲＬを施す。15・16（同一個体）は０段多条を用いて、15はＲＬ、16はＬＲ・ＲＬの羽状縄文を施し一部重複させる。17はＬＲ（０段多条）・ＲＬの羽状縄文、18～21はＲＬ（０段多条）、22はＬＲ、26はＲＬ＋１のの第一種附加条をそれぞれ施す。23～25はＬを用いた単軸絡条体によるもので、23・24（同一個体）は木目状、25は網状に施す。



第13図　第４号住居跡出土土器



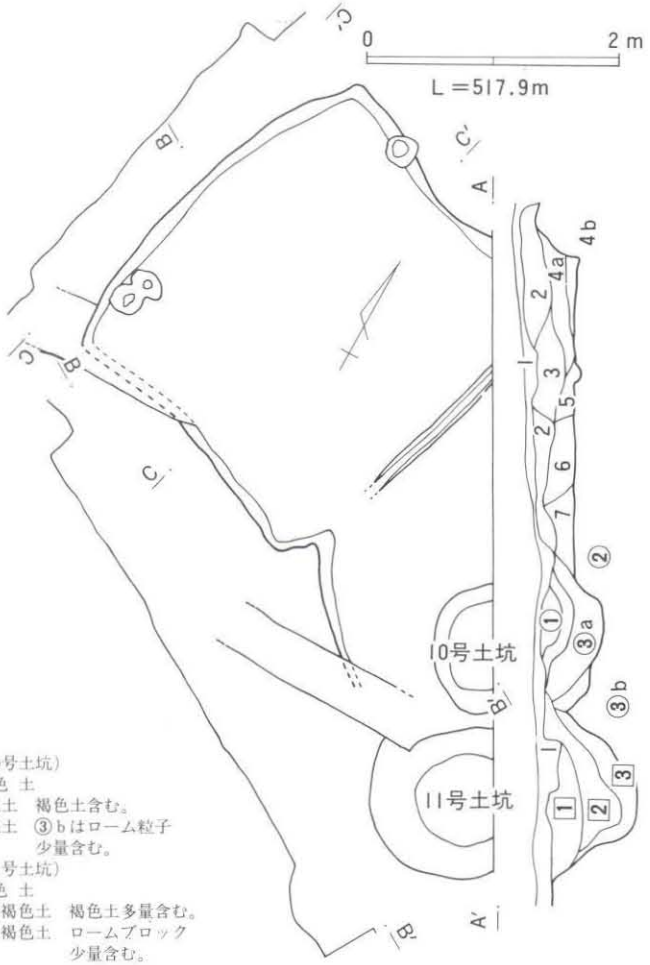
第14図　第４号住居跡出土石器

第５号住居跡

Ｈ－５、Ｉ－５グリッドに位置。土層断面では顕著でなかったが、5ａ号（北半部）．5ｂ号（南半部）の2軒重複が想定される。5ｂ号南東部は10号及び11号土坑により破壊されている。なお、この土坑の新旧関係は10号→11号である。

5ａ号の形状は、南東部が調査区域外だが、長軸2.7ｍ、短軸2.5ｍのほぼ方形を呈すると思われる。5ｂ号は大半が調査区域外のため、規模・形状は不明である。

壁の残存高は、5ａ号は31㎝、5ｂ号は19㎝である。床面は両者ともやや堅緻で、ピットは5ａ号壁付近で３基確認された。



1．灰黒色土　軽石粒含む。
2．褐　色　土　灰黒色土微量含む。
3．淡黒褐色土　褐色土味やや強い。ロームブロック微量。
4．淡黒褐色土　３に似るがローム粒子含む。４ｂはローム粒子やや多量含む。
5．淡黒褐色土　ローム粒子少量含む。
6．淡黒褐色土　黒みやや強い。
7．淡黒褐色土　５とほとんど同質。

（10号土坑）
①褐　色　土
②黒褐色土　褐色土含む。
③黒褐色土　③ｂはローム粒子少量含む。

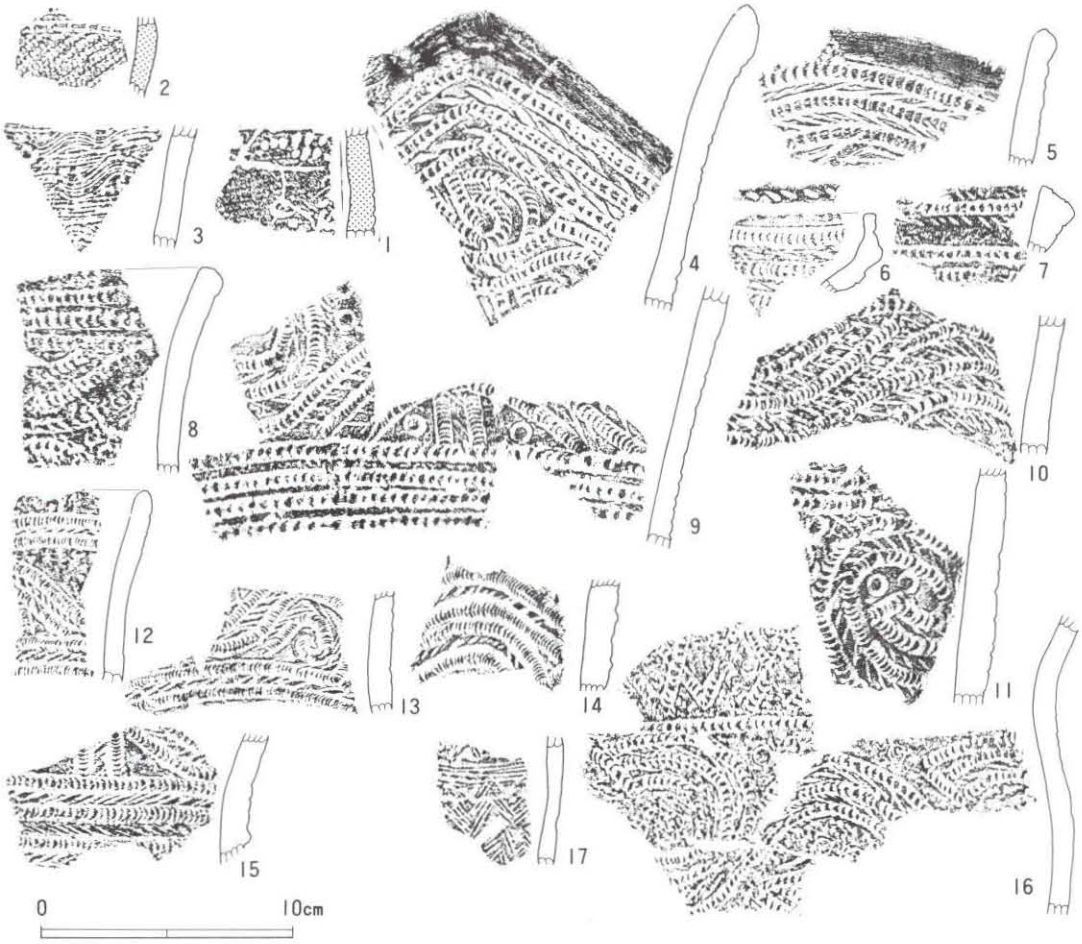
（11号土坑）
1．褐　色　土
2．淡黒褐色土　褐色土多量含む。
3．淡黒褐色土　ロームブロック少量含む。

第15図　第５号住居跡平面・断面図

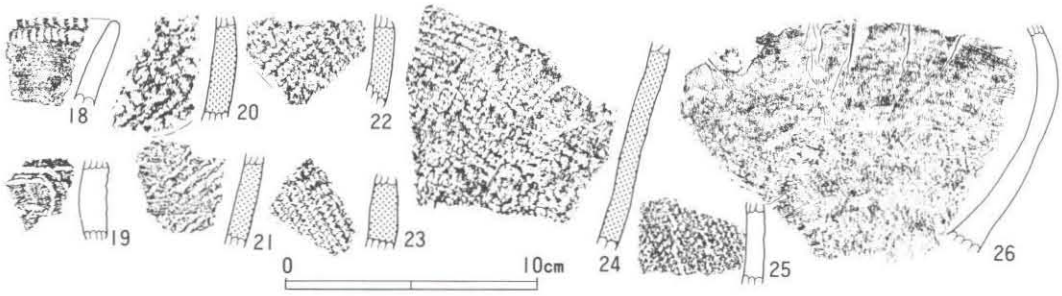
第５号住居跡出土遺物

遺物は土器片及び石器・石片で、５ａ号の覆土中上面において集中して出土し、５ｂ号では皆無である。また10号土坑覆土中より28が出土した。

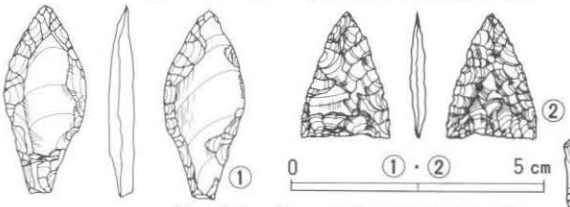
１は箆状工具による沈線を交錯し複数の小区画を描き、区画内に棒状工具による刺突を充塡し、また沈線の交点に円形竹管による刺突を施す。２は平行沈線＋連続爪型文を巡らし、地文ＬＲを施す。３は櫛歯状工具による数条からなる平行沈線と同工具による波状線を交互に巡らす。４～16は平行沈線＋幅広の連続爪型文と斜位の刻目を施す隆帯の交互の繰り返しで文様を描く。９～11と12～14はそれぞれ同一個体。17は半截竹管で集合沈線を鋸歯状に巡らし、余白部分を陰刻する。19は隆帯により枠状文を施す。20は閉端環付、21はＬＬ、22～25は羽状縄文をＬＲ・ＲＬ（21・23は０段多状）で施す。26はＲＬを施す。



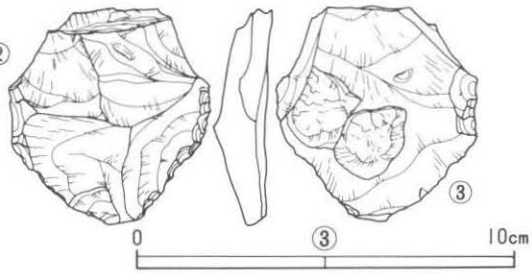
第16図　第５号住居跡出土土器（１）



第17図　第５号住居跡出土土器（2）



第18図　第５号住居跡出土石器

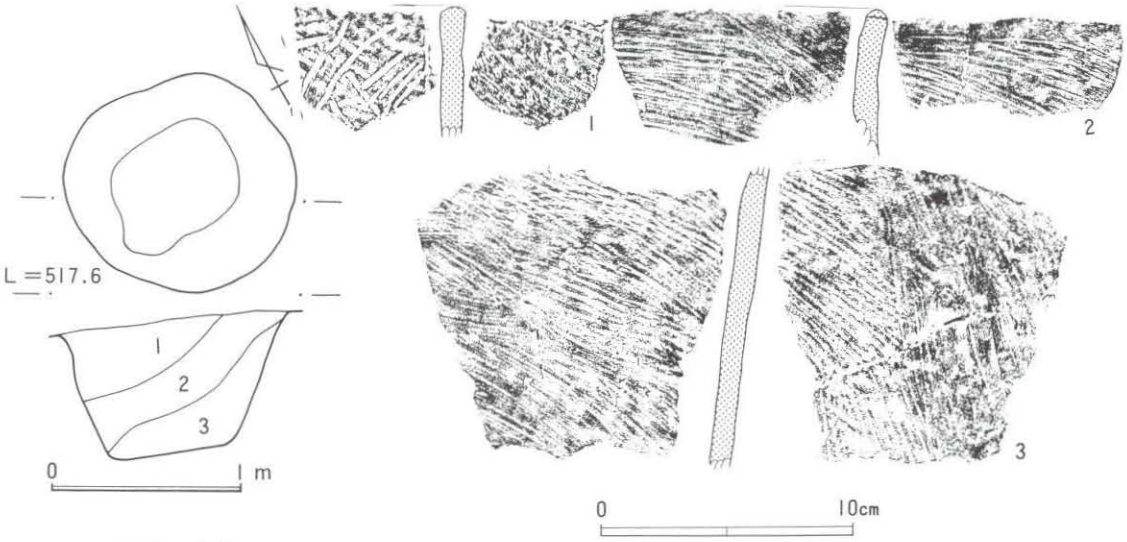


②　土　坑

２０号土坑

Ｆ－５グリッドに位置。確認面を基準とし、長軸121cm・短軸118cmのほぼ円形を呈し、深さ75cmで底面はやや平らである。

〔遺物…第19図〕１及び２・３（同一個体）は表裏に条痕を施し、口唇上に刻目を加える。１では表面のみ箆状工具により沈線を交錯させる。



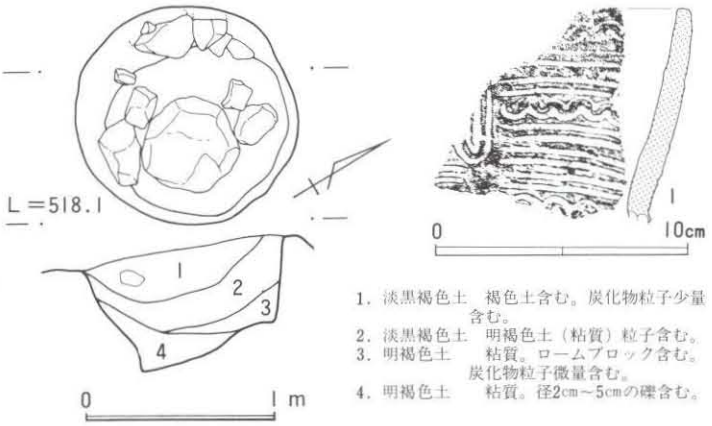
1．黒褐色土　粘質。
2．黒褐色土　粘質。ローム粒子微量含む。
3．黒褐色土　粘質。ローム粒子やや多量含む。

第19図　20号土坑平面・断面図及び出土土器

4号土坑

F－4グリッドに位置。確認面を基準とし、長軸119cm・短軸 115cmのほぼ円形で深さ68cm、底面は南西方向へ傾斜する。底面付近より拳大～人頭大の自然礫が11個出土した。

〔遺物…第20図〕1は2～3条の平行沈線とコンパス文を交互に廻らし、加えて平行沈線を「U」状に垂下させる。

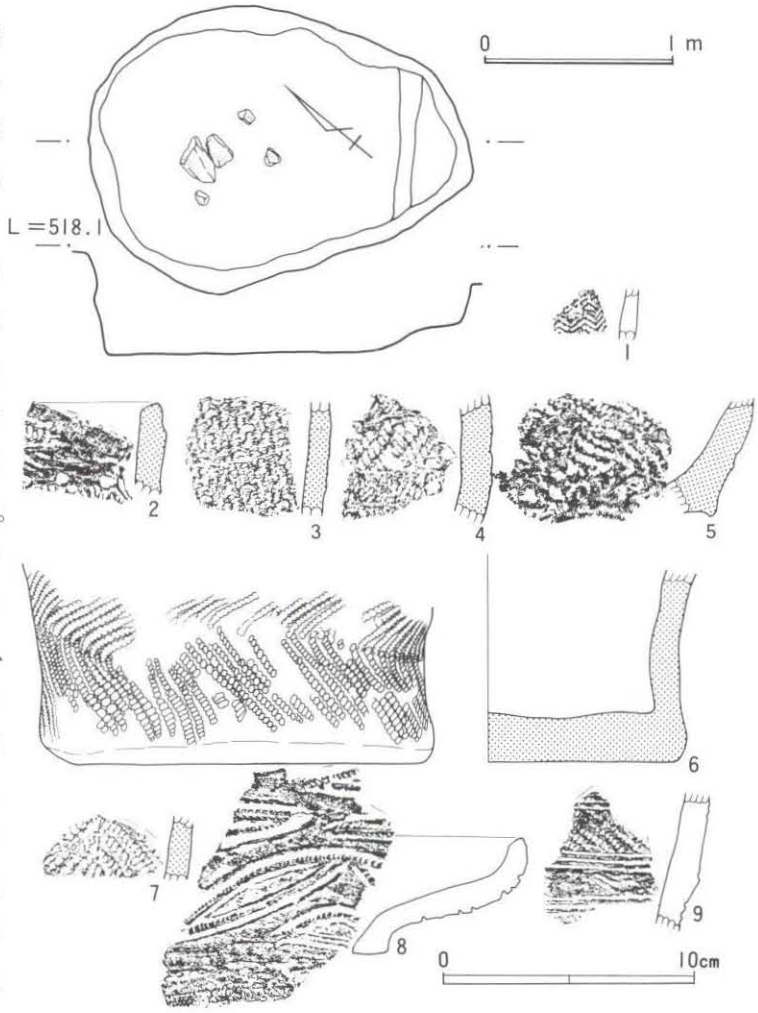


第20図　第4号土坑平面・断面図及び出土土器

5号土坑

G－4グリッドに位置。確認面を基準とし、長軸198cm・短軸 138cmの南北に長い不整楕円形を呈し、深さ56cmで底面は平坦である。

〔遺物…第21図〕1は山形押型文を施す。2は微隆線を交錯し形成した区画内に条痕を施し、微隆線上に棒状工具で刺突を施す。4はL2本・R2本の結節回転を羽状に施す。5は上げ底状を呈する底部片で閉端環付RLを施す。6は深鉢型土器の胴下半部であり、結束したLR・RLを羽状に施し、底部付近でRL（0段多状）を重複させる。7はLR・RLで羽状に施す。8は特殊浅鉢型土器で、彫りの深い平行沈線＋連続爪型文（外側竹管）で木葉状入組文を施す。9は3条一組の平行沈線



第21図　第5号土坑平面・断面図及び出土土器

を数段廻らす。地文はＲＬ

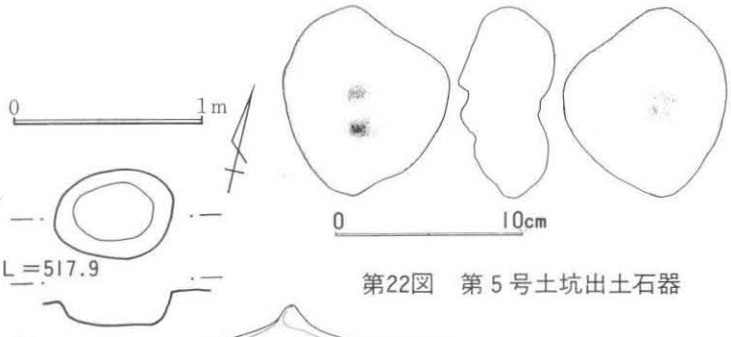
14号土坑

Ｈ－５グリッドに位置。確認面を基準とし、長軸64㎝・短軸46㎝、深さ16㎝である。

〔遺物…23図〕１は底部から開き加減に立ち上がり、胴部は直立ぎみに立ち、口縁にかけて外反する器形を呈する。口縁は僅かに波状を成し、波頂部に１ケ所小突起をもつ。対となる突起の存在は破損のため不明である。また、口縁下位に僅かな段を有し斜位の刻目を廻らす。胴部上位以上を文様帯とし、平行沈線＋連続爪型文により文様を描き、以下に地文RLを施す。

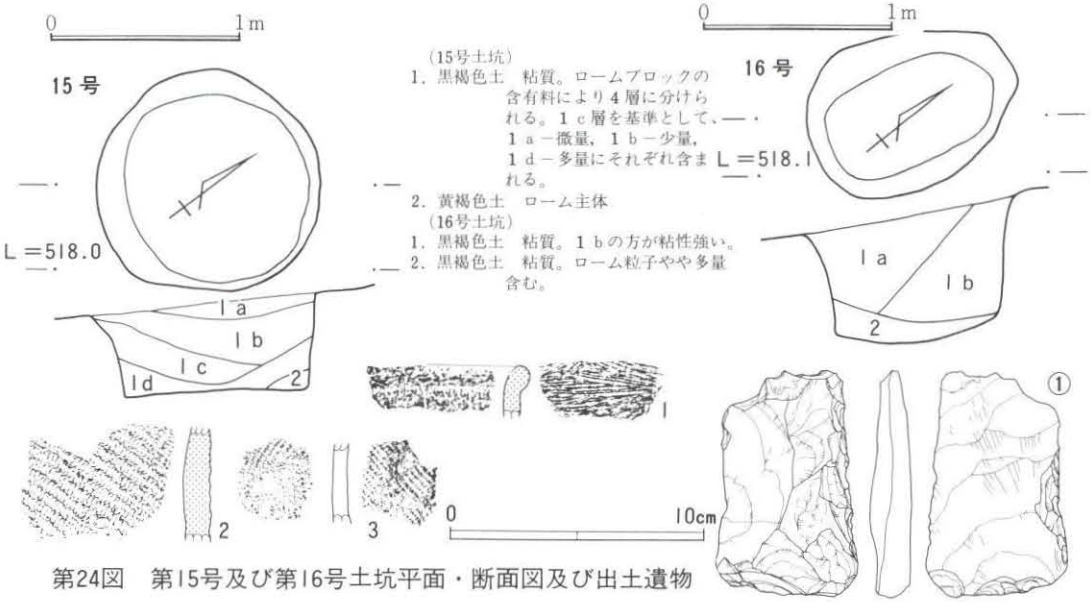
15号土坑

Ｃ－３グリッドに位置。確認面を基準とし、長軸118㎝・短軸117



第22図　第５号土坑出土石器

第23図　第14号土坑平面・断面図及び出土土器



第24図　第15号及び第16号土坑平面・断面図及び出土遺物

cm・深さ53cmである。

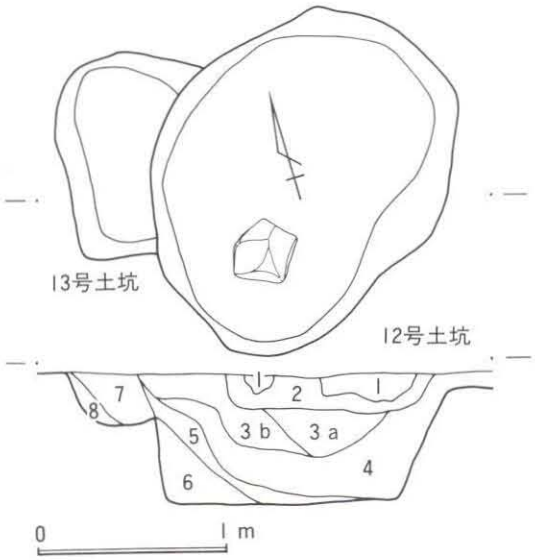
〔遺物…24図〕2は0段多条使用のRL・LRを羽状に施す。3は弥生土器の可能性が考えられる。1は肥厚する口唇の直下に絡条体の側面圧痕を横位に廻らす。内面には同上の原体を用い、条痕を施す。

16号土坑

D－3グリッドに位置。確認面を基準とし長軸 113cm・短軸83cmの南北に長い楕円形を呈し、深さ76cm、底面はほぼ平らである。

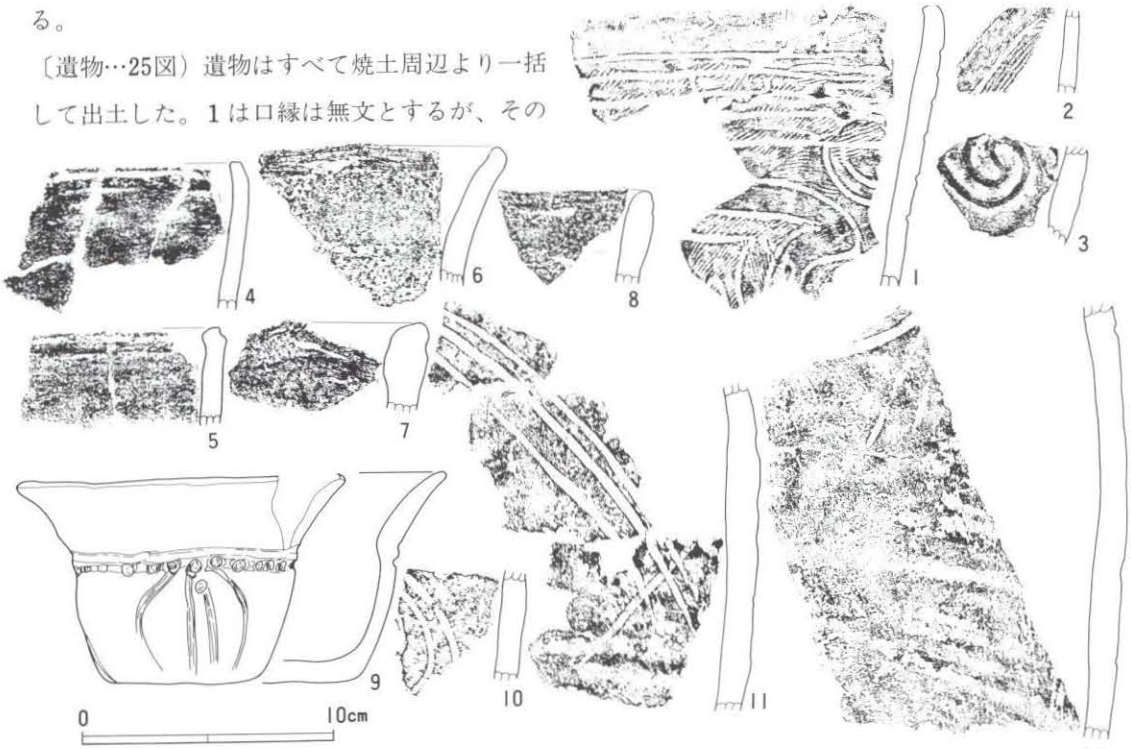
12・13号土坑

H－5グリッドに位置。確認面を基準とし、12号が長径194cm・短径153cmの南北にやや長い不整楕円形で、深さ68cm、13号は東半部を12号に破壊されるが、長径105cm・短径88cmの南北に長い不整円形と思われ、深さは16cm。12号の上・中面に焼土が認められ、二次利用も考えられる。

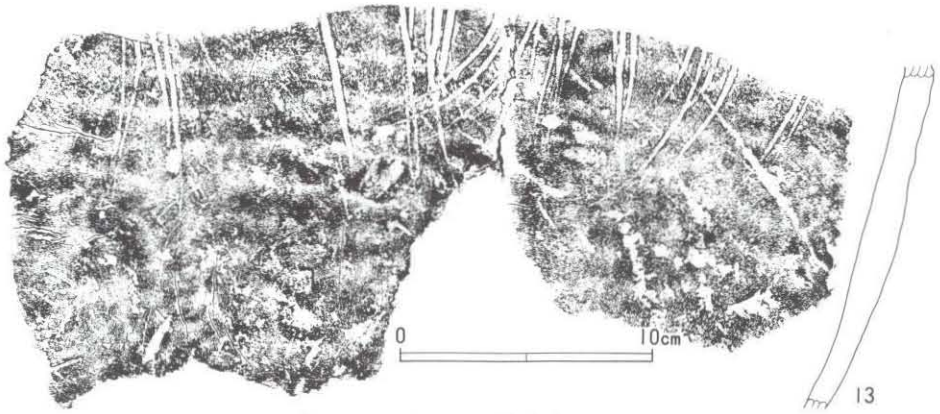


1. 焼土ブロック
2. 褐　色　土　焼土粒子含む。
3. 褐　色　土　ローム粒子含むが、3 a は少量。炭化物片少量含む。
4. 褐　色　土　淡黒褐色土含む。ローム粒子多量含む。
5. 黒 褐 色 土　褐色土含む。ローム粒子微量含む。
6. 淡黒褐色土　ローム粒子微量含む。
7. 淡黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック含む。
8. 淡黒褐色土　ロームブロック多量含む。

〔遺物…25図〕遺物はすべて焼土周辺より一括して出土した。1は口縁は無文とするが、その



第25図　第12号土坑平面・断面図及び出土土器（1）

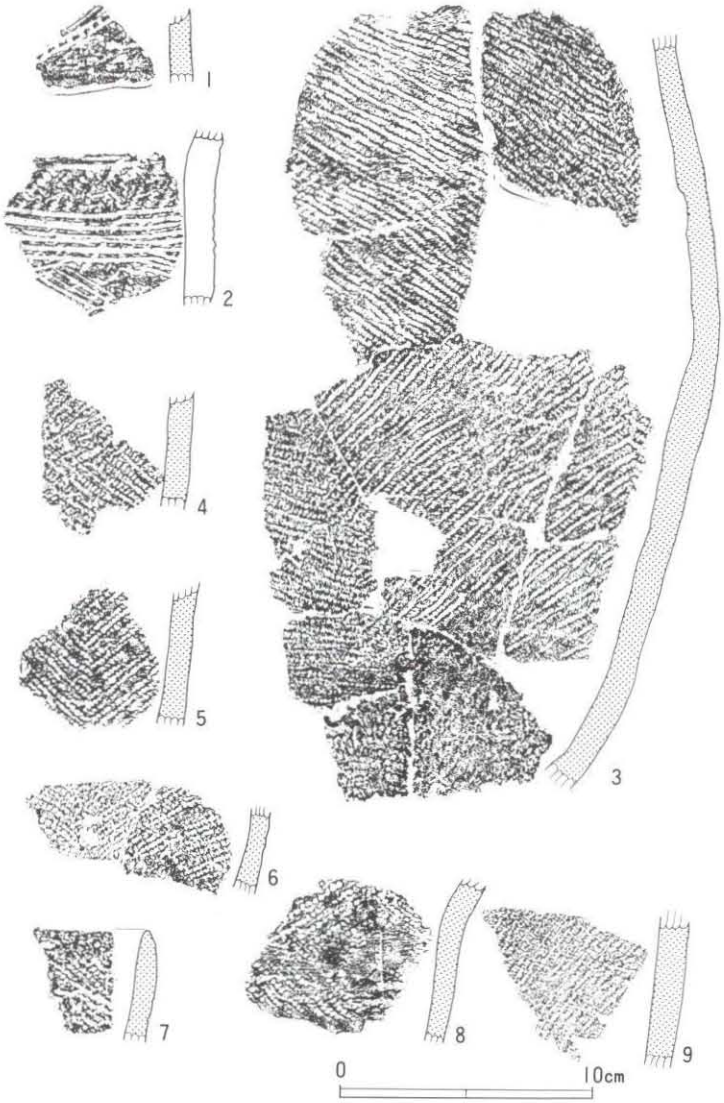


第26図　第12号土坑出土土器（2）

直下にＬＲ施文後沈線を５条廻らす。以下文様帯を形成し、沈線により直・曲線を描き、その区画内にＬＲを施し部分的に磨消す。２は沈線＋ＬＲ充塡施文。３は渦状文様を隆線で表出。４・５は口唇は内屈、直下に沈線を１条廻らす。６・７は波状口縁波頂部。９は頸部に沈線を１条、直下に列点を廻らす。胴部には沈線により、２条の縦位の直線とこれを(　)状にはさむ弧線のモチーフを３単位施す。10～13は沈線により直・曲線を垂下するものである。

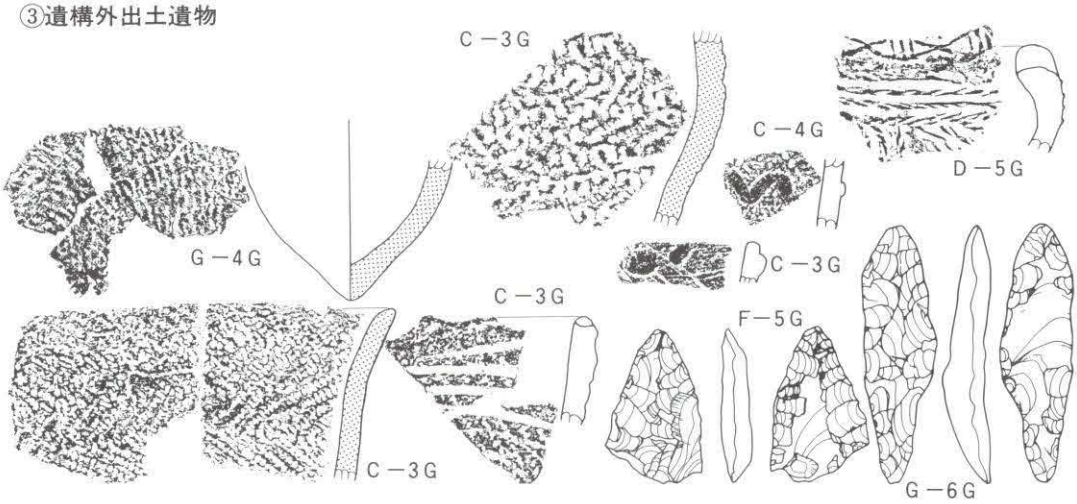
８号土坑（平・断面図…第9図）

Ｇ－４グリッドに位置。確認面を基準とし、長径 190cm・短径160cm、深さ80cmである。 フラスコ状を呈し、底面は平坦である。〔遺物…27図〕１は平行沈線＋連続爪型文、２は地文ＬＲに半截竹管で集合沈線を施す。３・４、５～７はそれぞれ同一固体で、この両者及び８はＬＲ・ＲＬを羽状に施し、菱状に構成する。９はＬＲと０段多条使用のＬＲを施す。



第27図　第８号土坑出土土器

③遺構外出土遺物



第28図　遺構外出土遺物

6．調査の成果と課題

今回の調査で確認された住居跡及び土坑は、出土遺物のほとんどが覆土中であり、その年代の特定は困難であるが、覆土下面出土の土器片から、それぞれがやや時期差をもつものであると考えられる。限られた範囲内での調査のためその全貌はは知り得ないが、住居跡は縄文時代前期初頭～前期末葉、土坑は縄文時代早期～前期末葉のものと判断され、この間比較的継続して集落が営まれたと想定される。しかし各住居跡内において、焼土がほとんど認められない・床面がさほど硬くないものが多い・柱穴が顕著でないという点から、類推される上屋構造は比較的簡素なものであり、その使用は短期間であったと思われる。

出土土器については表－4のように分類される。尚、2号住居跡覆土内上面～床面で諸磯a式、5号住居跡覆土内上面～下面にかけて諸磯b式に各々比定される破片がまとまりをもち出土した。

本遺跡は山間の狭小な平坦地に立地し、湧水が隣接する。出土石器は石鏃・石匙・スクレイパーの類が多く、狩猟から獲物の解体までの一連の作業を当地で行なっていたことが伺える。しかし居住区間が限られることから数世代にわたる永続的な定住を想定するにはやや無理がある。町内において過去の発掘調査で確認された縄文時代前期集落跡（住居跡）(註1)はほとんどが名久田川流域河岸段丘上の比較的狭い平坦地に立地しており、さらに季節的なキャンプ地と推定される伊賀野遺跡(註2)のように山間におけるわずかな平坦地にも集落が形成される。本遺跡は立地的には両者の中間の様相を示し、狩猟活動に際しての拠点として断続的に営まれた可能性が示唆される。しかしこれらの小集落を統合し得ると思われる大規模集落の存在を明確にする調査例は無く、下平遺跡(註3)での諸磯b式期に比定される大型住居跡はこれを想定し得る唯一の資料である。中之条盆地付近や吾妻川各支流の下流域に形成された河岸段丘上では、より広大な居住空間が求め得るが遺構・遺物の確認例は現在のところ皆無である。赤城山西南麓や榛名山東南麓では、分布

調査での判断であるが黒浜・諸磯ａ式期の遺跡は侵食谷に面する舌状台地状地形に多く、広く開けた台地上にほとんど認められないことがいわれている(註4)。当地域での前期集落(註5)の立地は、本遺跡をはじめこれに類似した傾向が伺える。赤城山麓における様相等から基本的な生活様式が散居的な小集落から集住的な継続集落へ変換する時期が縄文時代前期から中期の間にある可能性がいわれている(註6)。当地域では断片的な資料が多く、各集落が完結性を有するかどうかを明確にし、集落間の各時期における有機的関連(註7)を想定するためには、今後の調査例の増加を待たねばならない。

早　　期　押型文系土器。(21図－１)

早期後半　条痕文系土器。(４図－１、16図－１、19図－１～３、21図－２)

前期初頭　撚糸側面圧痕が多用される。地文は０段多条使用の原体を多く使用し、羽状構成が多い。胎土中有機物繊維を含むものが多い。多くは花積下層式以降二ツ木式までに比定される。(４図－11、10図－1･2･16～19、13図－1～8･13～21･23～25、24図－1･2)

前期前半　竹管等工具による沈線や連続爪型文等で文様を描く。地文は原体の結節回転、閉端環付の使用等がみられ、羽状構成となるものが多い。また胎土中有機物繊維を含むものが多い。多くは関山式古段階から黒浜式及び有尾式までに比定される。(４図－２～7･10～13、６図－1～3･24～26、10図－3～12、13図－9～11･22･28、16図－2、17図－20～24、20図－1、21図－3～7、27図－1･3～9)

前期後半　多くは諸磯ａ式から諸磯ｂ式に比定される。竹管等工具による沈線や連続爪型文等で文様を描く。地文は単節斜縄文が多い。(４図－8･9、６図－4～23･27～37、10図－3～17、17図－18･25･26、21図－8･9、23図－1、27図－2)

中期前半　(17図－19)

後期前半　堀之内Ⅱ式に比定される。(25図－1～12、26図－13)

註１　丸山公夫他1985　『大塚遺跡群五十嵐遺跡第２次』　中之条町教育委員会
　　桐谷　優　1985　『大塚遺跡群宿割遺跡』　中之条町教育委員会

註２　唐沢至朗　1989　『下沢渡伊賀野遺跡』　中之条町教育委員会

註３　巾　隆之・福田義治　1986　『平遺跡群下平遺跡　発掘調査概報』　中之条町教育委員会

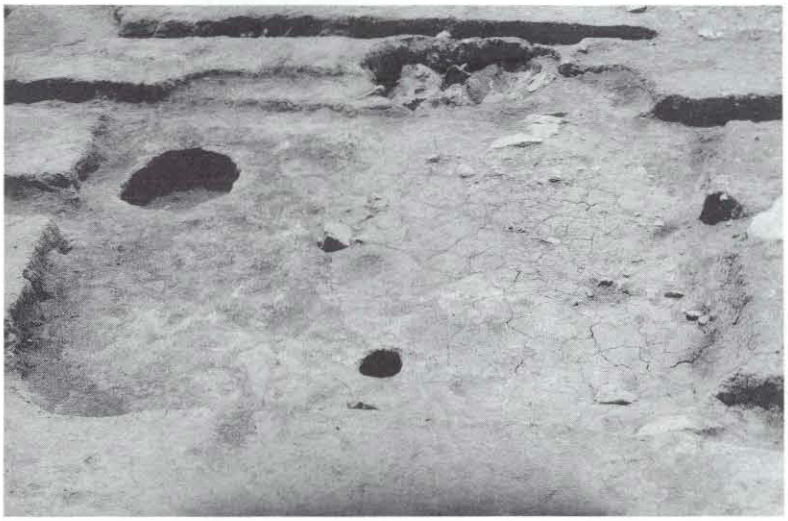
註４　鬼形芳夫　1985　「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21号　群馬県史編纂委員会
　　鬼形芳夫　1988　「遺跡の動態と集団関係」『研究紀要』５　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

註５　赤城・榛名の両山麓では黒浜・諸磯ａ式期の遺跡数は前時期より急増し、諸磯ｂ式期に至り減少するという(註５文献)が、本地域では不明確である。

註６　能登　健　1986　「まとめ」『森山遺跡』　北橘村教育委員会

註７　赤城・榛名の両山麓では黒浜・諸磯ａ式期の遺跡は一台地を一遺跡が占地し、棲み分けが秩序をもっておこなわれていたと考えられており、また加曽利Ｅ式期に至り遺物の散布地に大・小の二面性が顕著となり遺跡の性格の多様化が想定されている(註４文献)。

◀調査前風景
（西側より）



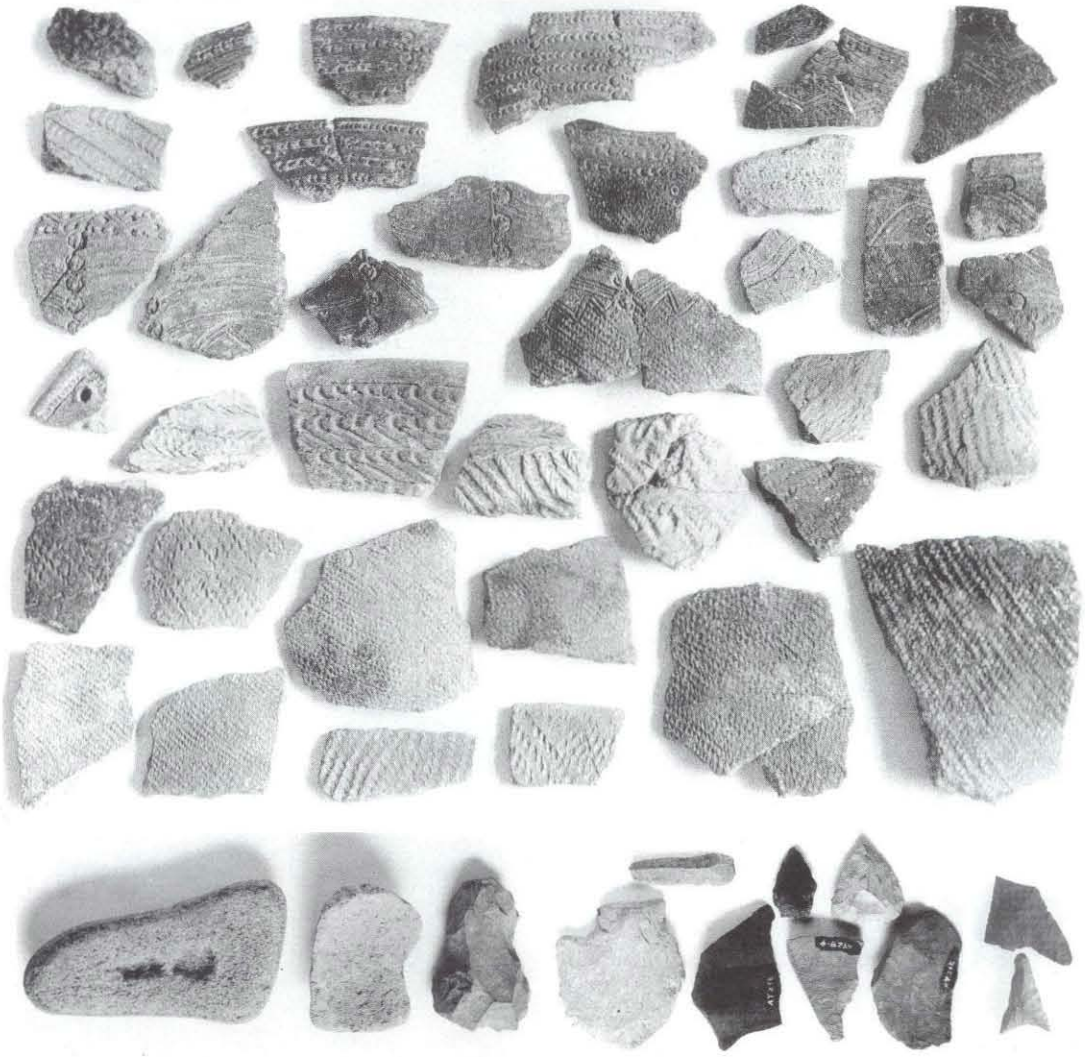
1 号住居跡全景▶

1 号住居跡出土遺物
▼

図版 2

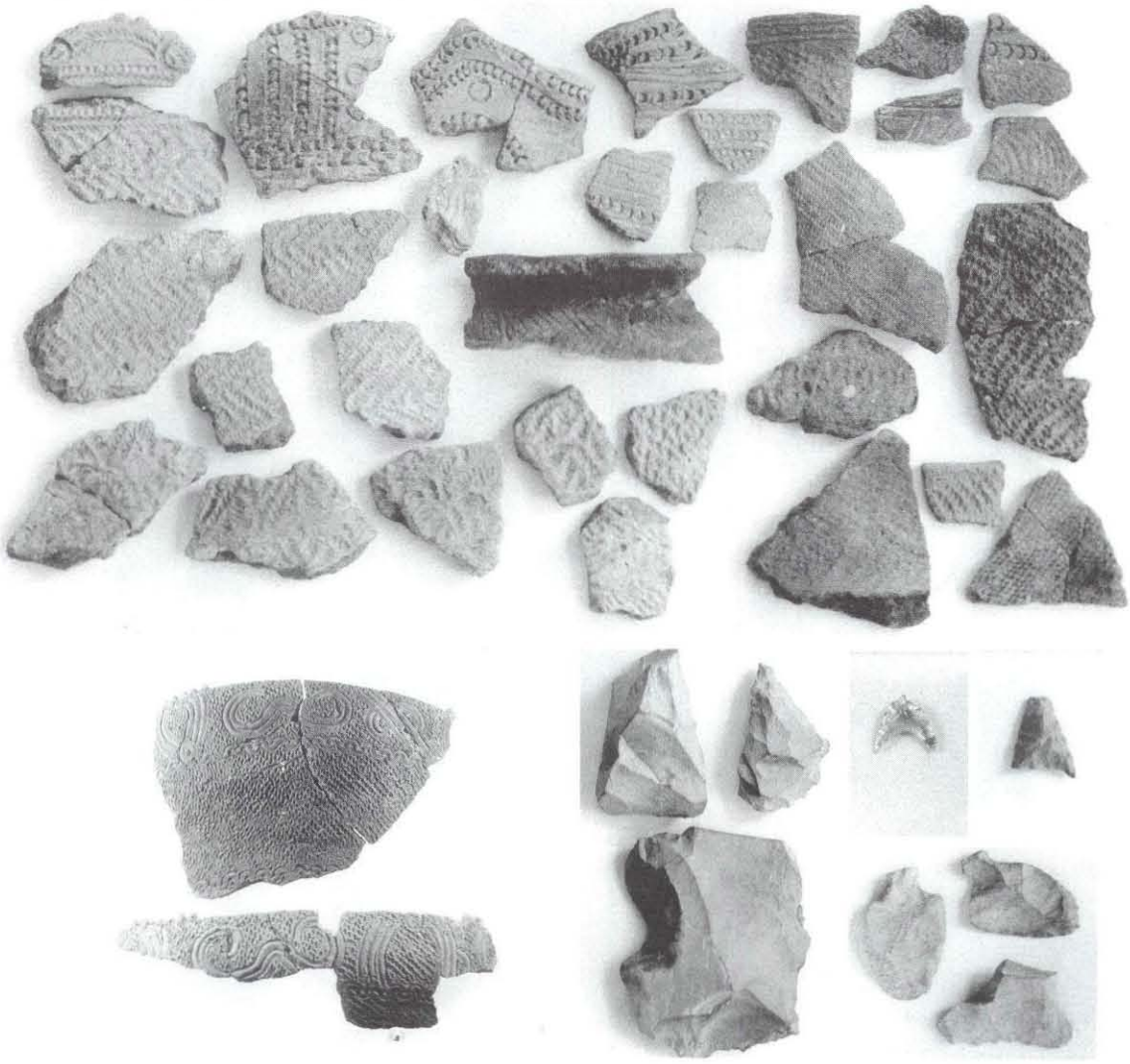
◀ 2号住居跡全景

2 号住居跡出土遺物
▼



◀3 号住居跡全景

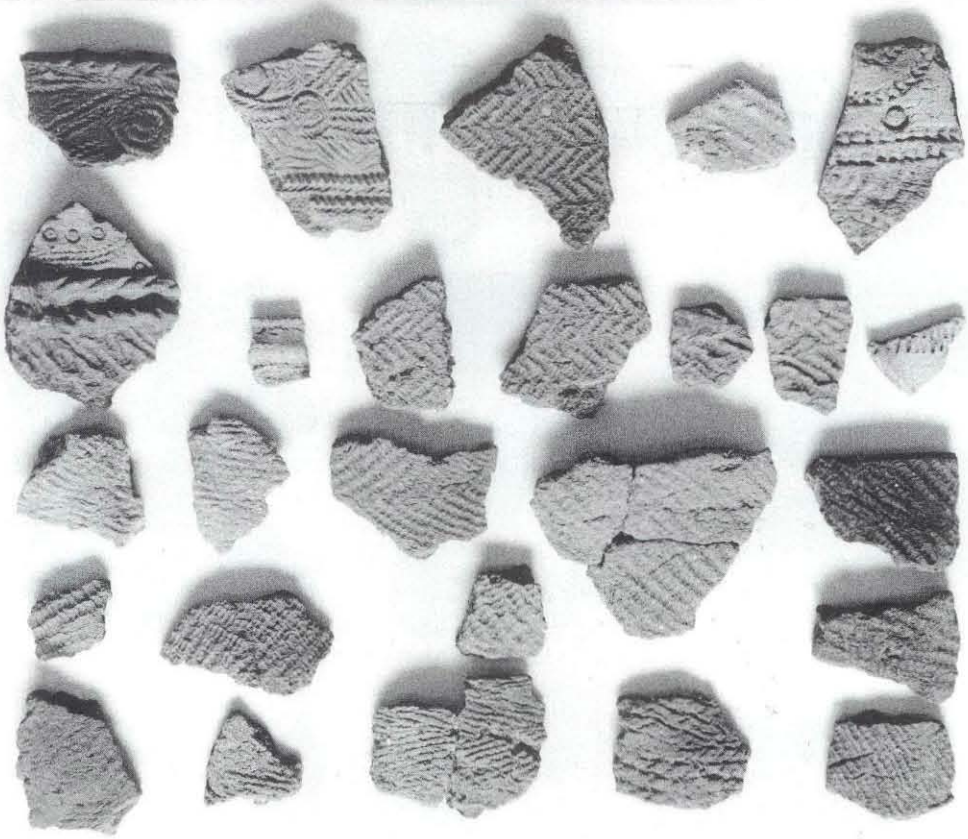
3 号住居跡出土遺物▼

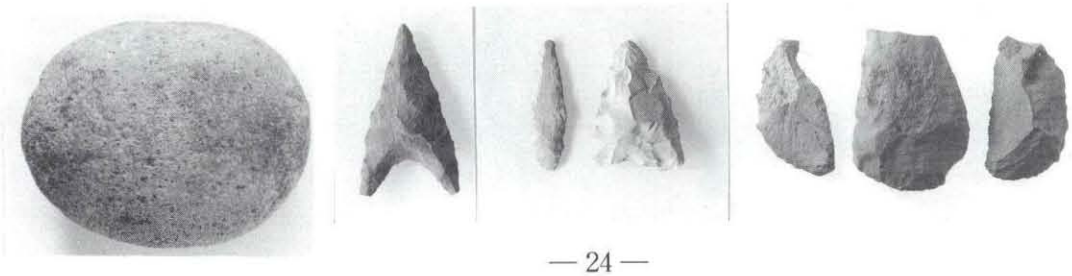


図版 4

◀ 4 号住居跡全景

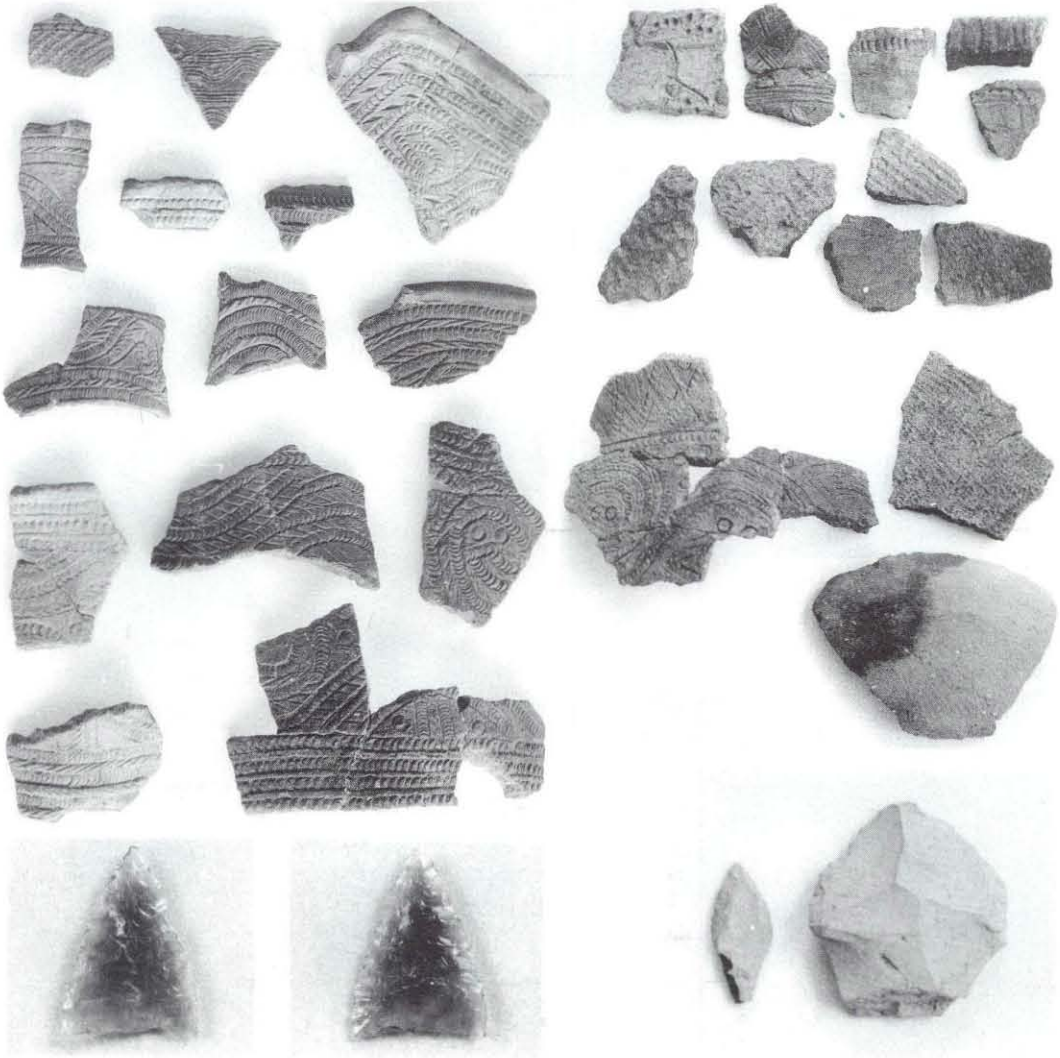
4 号住居跡出土遺物 ▼





◀ 5 号住居跡全景

5 号住居跡出土遺物 ▼

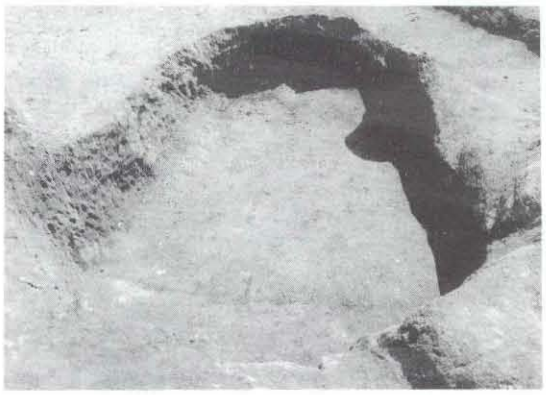


図版 6

◀ 4 号土坑全景

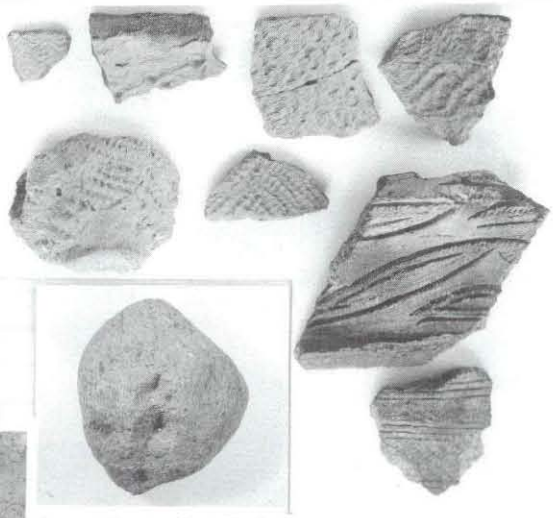
4 号土坑出土遺物▼

5 号土坑遺物出土状況▼



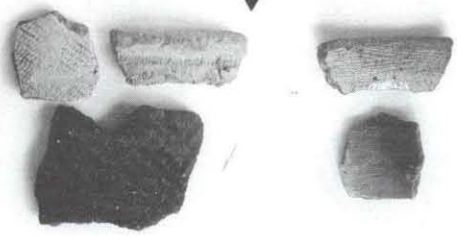
▲ 5 号土坑全景

5 号土坑出土遺物▶▼

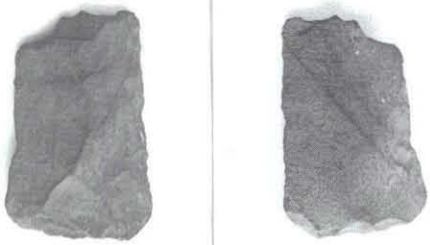


▼ 1 5 号土坑全景

1 5 号土坑出土遺物▼



１６号土坑全景



１６号土坑出土遺物

２０号土坑全景

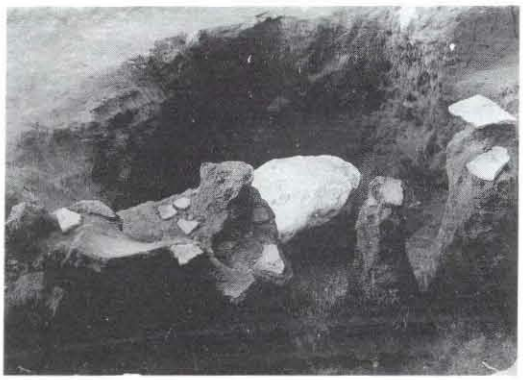
２０号土坑出土遺物

８号土坑全景

８号土坑出土遺物

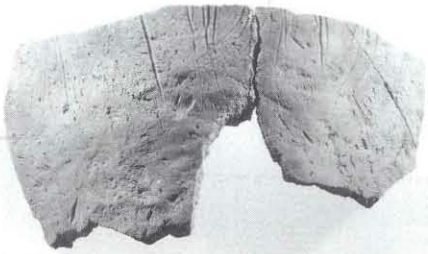
図版 8

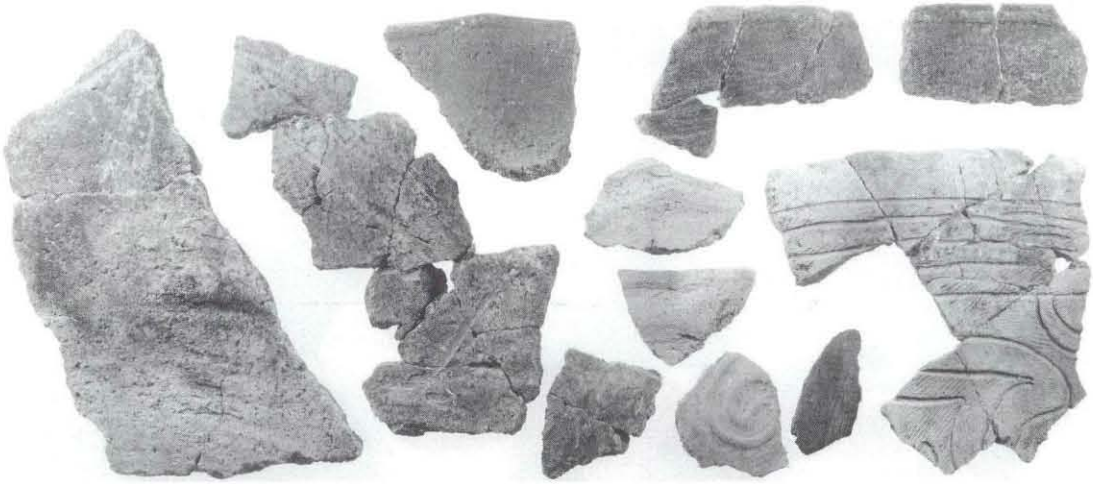
▲１２号・１３号土坑全景



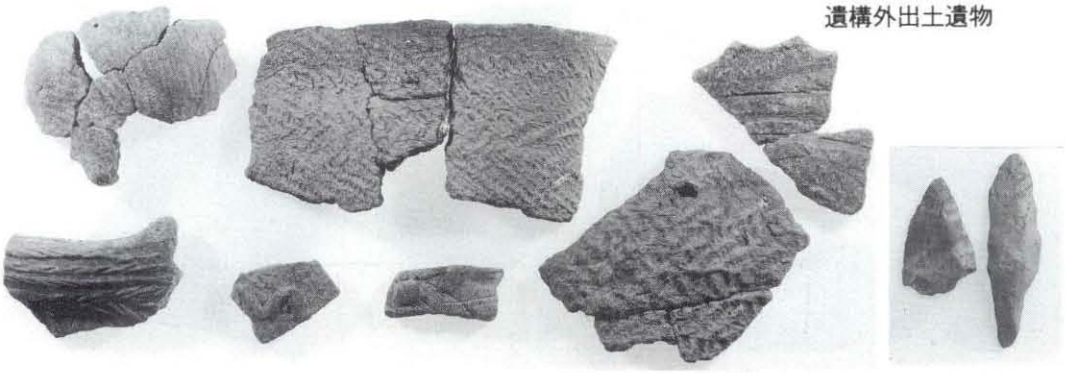
１２号土坑遺物出土状況▲

１２号土坑出土遺物
▼



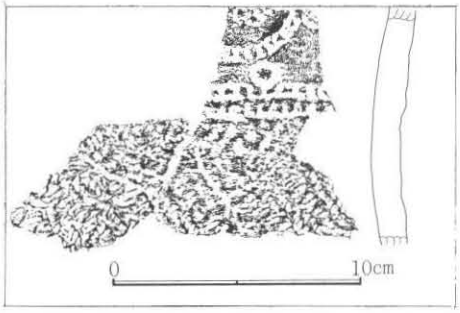


遺構外出土遺物



石　器　観　察　表

No.	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	厚さ(cm)	石　材
2号住－1	石　鏃	1.95	1.3	0.9	0.5	頁　岩
2	石　鏃	2.25	2.3	1.2	0.3	チャート
3	石　鏃	3.2	2.9	9.2	1.0	頁　岩
4	石　鏃	2.33	1.63	2.3	0.5	頁　岩
5	石　匙	6.09	5.25	32.5	0.8	頁　岩
6	スクレイパー	4.17	1.3	3.5	0.5	頁　岩
7	スクレイパー	5.52	3.6	17.5	0.8	頁　岩
8	スクレイパー	5.4	3.6	15.0	0.8	頁　岩
9	スクレイパー	4.5	3.18	12.0	0.8	頁　岩
10	スクレイパー	5.1	4.52	27.0	0.9	硬質頁岩
11	スクレイパー	7.9	5.3	106.0	2.3	頁　岩
12	凹　石	13.08	7.8	315.0	2.4	砂　岩
13	凹　石	8.0	5.57	107.5	1.7	安山岩
3号住－1	石　鏃	1.45	1.59	0.5	0.65	黒曜石
2	石　鏃	2.3	1.56	1.2	0.6	チャート
3	石　匙	3.20	4.32	10.1	0.6	頁　岩
4	石　匙	5.19	3.19	11.4	0.5	頁　岩
5	スクレイパー	3.2	5.27	19.0	1.0	頁　岩
6		11.65	9.08	377.5	3.3	頁　岩
7	凡字形石器	8.87	5.64	235.0	4.1	頁　岩
8	スクレイパー	7.78	4.53	69.5	1.9	頁　岩
4号住－1	石　鏃	2.2	1.28	0.85	0.5	頁　岩
2	石　錐	3.38	1.0	1.4	0.3	頁　岩
3	石　鏃	3.3	2.35	5.1	0.8	頁　岩
4	石　匙	5.07	3.0	12.5	0.7	頁　岩
5	スクレイパー	5.38	3.02	17.5	1.0	頁　岩
6	スクレイパー	5.88	4.34	41.0	1.05	頁　岩
7	磨　石	11.92	9.26	1120.0	6.1	安山岩
5号住－1	石　鏃	3.69	1.56	2.45	0.35	頁　岩
2	石　鏃	2.4	1.76	1.1	0.35	黒曜石
3	スクレイパー	5.3	5.6	36.0	1.0	頁　岩
5号土坑	凹　石	10.02	8.57	392.5	4.6	安山岩
16号土坑	石　斧	8.72	5.45	82.5	1.4	頁　岩
F－5G	石　鏃	3.0	1.94	0.55	2.9	チャート
G－6G	石　錐	5.0	1.4	0.75	4.8	頁　岩

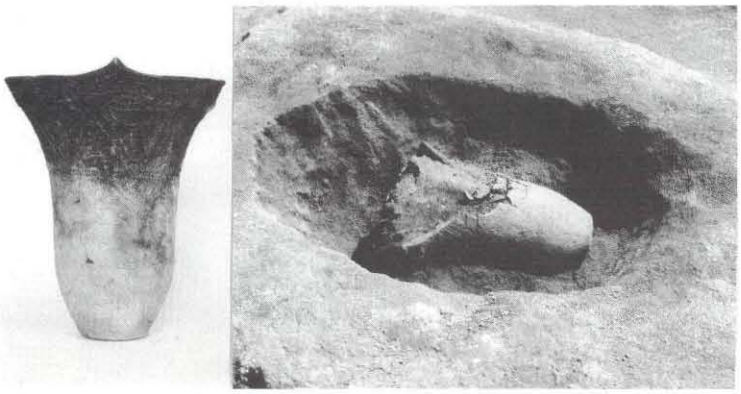


整理作業終了後、第3号住居跡出土土器片(No.11)と第4号住居跡出土土器片(No.9)の接合が判明したので拓影図を掲載する。

中之条町発掘調査報告書第11集

蟻川遺跡群柳沢遺跡

印　刷　平成2年3月31日
発行者　中之条町教育委員会
〒377-04
中之条町中之条1091番地
TEL 0279-75-2111
印刷者　大道印刷工業



14号土坑遺物及び遺物出土状況